

北海学園大学

人文論集

第 75 号

北海学園大学人文学部

2023 年 8 月

執筆者紹介

寺田吉孝 (日本文化学科：教授【現在は北海学園大学：名誉教授】)
ハターエヴァ・テチャーナ (金沢大学：国際機構専門業務職員)
ベイ・リュドミーラ (ハリコフ大学：元准教授)
マンビ・イアン (日本文化学科：教授)
田中綾 (日本文化学科：教授)
一色紗矢香 (日本文化学科：4年)
池田和利 (佛教大学：大学院修士課程1年)

北海学園大学 人文論集 第75号

2023(令和5)年8月31日

編集 大谷通順 (日本文化学科)
上野誠治 (英米文化学科)

発行者 小松かおり

発行所 北海学園大学人文学部
〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号
電話(011)841-1161

印刷・製本 (株)アイワード
札幌市中央区北3条東5丁目

北海学園大学

人文論集

第75号

2023年8月

目次

北海学園大学人文学会第10回大会シンポジウム 記録	
言語と文化からウクライナを理解する……………	1
講演1	
「ウクライナというところ ― 地理と歴史の復習 ―」 …………… 寺田吉孝	4
講演2	
「ウクライナの木造教会堂建築 ― 歴史的背景及び構成上の特質 ―」 …………… ハターエヴァ・テチャーナ	12
講演3	
「ウクライナにおけるロシア語とウクライナ語」 …………… ベイ・リュドミーラ	24
講演4	
「ウクライナ語正書法史について」…………… 寺田吉孝	35
北海学園大学人文学部 2022年度 優秀卒業研究賞……………	37
How to Write Useful and Effective Reading Comprehension Tests for Intermediate Level Learners…………… Ian MUNBY	55
資料紹介 前川正の短歌 ― 『生命に刻まれし愛のかたみ』 未収録歌を中心に …………… 田中 綾・一色 紗矢香・池田 和利	114(-)

題字揮毫：島田無響氏

HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY

STUDIES IN CULTURE

No. 75

August 2023

CONTENTS

Hokkai-Gakuen University Society of Humanities 10th Symposium Understanding Ukraine through language and culture·····	1
A place called Ukraine —The review of geography and history— ····· Yoshitaka TERADA	4
Ukrainian wooden church architecture —historical background and compositional characteristics— ····· Tetyana KHATAEVA	12
Russian and Ukrainian in Ukraine ······ Lyudmila BEI	24
About the history of Ukrainian orthography ····· Yoshitaka TERADA	35
2022 Outstanding Graduation Research Award ······	37
How to Write Useful and Effective Reading Comprehension Tests for Intermediate Level Learners····· Ian MUNBY	55
<hr/>	
Investigation and Introduction: TANKA of Tadashi Maekawa ····· Aya TANAKA, Sayaka ISSHIKI & Kazuto IKEDA	114(—)

FACULTY OF HUMANITIES
HOKKAI-GAKUEN UNIVERSITY
Sapporo Hokkaido Japan

言語と文化からウクライナを理解する

会長挨拶

講演

寺田 吉孝(北海学園大学人文学部日本文化学科 教授)

「ウクライナというところ ― 地理と歴史の復習 ―」

「ウクライナ語正書法史について」

ハターエヴァ・テチャーナ(金沢大学国際機構 専門業務職員)

「ウクライナの木造教会堂建築 ― 歴史的背景及び構成上の特質 ―」

ベイ・リュドミーラ(ハリコフ大学 元准教授)

「ウクライナにおけるロシア語とウクライナ語」

総合司会

柴田 崇(北海学園大学人文学部英米文化学科 教授)

日時 2023年1月21日(土曜日) 12:30~14:10

会場 北海学園大学7号館D30番教室

主催 北海学園大学人文学会

北海学園大学人文学会 第10回大会

開会の挨拶

○**司会** では、定刻になりましたので、北海学園大学人文学会第10回大会を開催したいと思います。

本日、総合司会を務めます柴田と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、人文学会会長から一言御挨拶申し上げます。

○**小松氏** こんにちは。人文学部長兼人文学会長の小松かおりと申します。

今日は、昨夜からの大雪の中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

人文学会は、本学の人文学部の教員有志の研究会です。基本的に、メンバーで研究会を実施することが多かったのですが、今回に關しましては、昨年2月24日に始まりましたロシアのウクライナ侵攻で、一体、世界はどうなってしまうのかと多くの方が考えられた、そういう時期の翌年ということもあり、今年3月で定年退職される寺田先生が、ロシア語、ウクライナ語を含む東スラヴ諸語の御専門であるということから、第10回の研究会としまして「言語と文化からウクライナを理解する」というテーマで人文学会を開催し、多くの皆さんに御出席いただきたいと考えて、広く開催をお知らせしました。今日は、ゆっくりお楽しみください。

○**司会** それでは、お話しいただくに先立ちまして簡単に趣旨の説明をいたします。

趣旨と申しますか、今回、このテーマを選んで寺田先生にお願いした理由でございますが、まず、もちろん、時宜を得たテーマであるということがありますが、日々、ウクライナ、あるいは、ロシアの報道に接するに当たりまして、私が思うところが二つあったということも理由でございます。

一つ目といたしましては、我々、非常に忘れやすいと。忘却というのがキーワードになろうかと思えます。

紛争が起こってから、どこから数えるかということもありますが、侵攻があつてから1年が経とうとしておりますが、ウクライナの報道というのが日常化して、場合によっては他人事のようにないだらうかというふうに思う節があります。

もう一つは、非常に単純化して物事を見がちであるということも自覚せざるを得ません。

報道を見ていて、戦術に関する、軍事的な側面で、この問題を捉えがちではないかと。さらに言うと、善悪の戦いとして、状況を単純化してしまう嫌いがないだらうかということも思うわけでございます。

いわゆるウクライナ戦争に関する付焼刃の知識による思い込みを正していただき、ウクライナ、そして、可能な限りロシアについてもしっかり理解するという機会をいただくために、今回、寺田先生にお願いした次第でございます。

それでは、寺田先生、お願いします。

講演 1 「ウクライナというところ — 地理と歴史の復習 —」

寺 田 吉 孝

○寺田氏 人文学部の寺田と申します。よろしくお願ひいたします。

2022年2月24日、突如としてウクライナが有名になってしまいました。それより前は、ウクライナがどこにあるのかも、学生たちの多くは、知らなかったようです。南アメリカにあるとか、アフリカにあるとか言う学生もいました。ウガンダとかウルグアイと勘違いしていたような感じがします。しかし、昨年以来は、なかなか、有名になりました。それでも、ウクライナがどこにあるのか、あるいは、どんな国なのか、どんな人たちが住んでいるのか、あるいは、どんな歴史なのか、学生たちはよく知りません。

大体、日本では主に日本人が住んでいて主に日本語が話されているので、ウクライナでもウクライナ人が主に住んでいてウクライナ語が話されていると思っている学生がほとんどなのです。そのため、授業中にウクライナの地理とか歴史に触れながら、ウクライナの国の成り立ちについて授業で触れることがあります。

そこで、今回、必要ないかもしれませんが、「言語と文化から見るウクライナ」というテーマに入る前に、簡単にウクライナの地理と歴史を復習していきたいと思います。

まず、①のウクライナの概略地図と主要地名一覧をご覧いただきたいと思います。

[講演では、パワーポイントを使い、主要都市の場所を示したが、文書では、再現不可能なので、上記の地図で確認いただきたい。太字の大きめの文字で書かれた地名が大都市である。参考として、地図に書かれている地名の一覧を掲載する。ウクライナは、ウクライナ語とロシア語のバイリンガル

地域なので、ウクライナ語での地名とロシア語での地名を併記している。
一部、英語での地名と日本語での地名を書き加えている。]



※ウクライナ語が優勢な地域はウクライナ語で、ロシア語が優勢な地域はロシア語で書かれている。

ロシア語	ウクライナ語	その他
Киев キーイェフ	Київ クイーイウ	キエフ (日本語), Kyiv キーヴ (英語)
Харьков ハリコフ	Харків ハルキウ	Kharkiv カーキヴ (英語)
Одесса オデッサ	Одеса オデーサ	
Львов リヴォフ	Львів リヴィウ	
Запорожье ザポロージェ	Запоріжжя ザポリッジャ	
Донецк ドネツク	Донецьк ドネチク	
Луганск ルガンスク	Луганськ ルハンシク	
Симферополь シンフェローポリ	Симферополь シンフェローポリ	
Севастополь セヴァストーポリ	Севастополь セヴァストーポリ	
Ялта ヤルタ	Ялта ヤルタ	
Полтава ポルタヴァ	Полтава ポルタヴァ	
Кривой Рог クリヴォイ・ローグ	Кривий риг クリヴィイ・リーフ	
Кременчук クレメンチューク	Кременчук クレメンチューク	
Луцк ルーツク	Луцьк ルーチク	

ロシア語	ウクライナ語	その他
Ужгород ウジュゴロド	Ужгород ウジュホロド	
Черновцы チェルノフツイ	Чернівці チェルニウツイ	
Тернополь テルノーポリ	Тернопіль テルノーピリ	
Винница ヴィーンニツァ	Винниця ヴィーンニツャ	
Ровно ロヴノ	Рівне リヴネ	
Житомир ジトームイル	Житомир ジトームイル	
Днепропетровск ドニプロペトロフスク	Дніпропетровськ ドニプロペトロウシク	
Николаев ニコラーエフ	Миколаїв ムイコラーイウ	
Херсон ヘルソン	Херсон ヘルソン	
Черкасы チェルカーツスイ	Черкаси チェルカースイ	
Чернигов チェルニーゴフ	Чернігів チェルニーヒウ	
Крым クルイム	Крим クルイム	クリミア (日本語), Crimea クライミア (英語)
Днепр ドニエプル	Дніпро ドニプロー	Dnieper ニーパ(英語)

キエフ・ルーシという言葉を目にすることがあると思います。プーチン大統領がよく言ってますね。彼は、ロシアとウクライナは一体であると言っていますが、その根拠になっているのがルーシです。ルーシというのは国名です。キエフが中心だったから、キエフ・ルーシと言います。

②のキエフ・ルーシの地図をご覧ください。

次に、キエフ・ルーシの地図に、現在のウクライナの国境線（赤色）を書き加えてみます。③の地図をご覧ください。

ここで、わかるのは、現在、ロシアが侵攻しているハリコフ、ルガンスク、ドネツクはルーシの中に入っていないで、外にあります。クリミア半島もルーシに入っていません。キエフよりも南の方は、遊牧民族の通り道になっていたため、なかなか人が定住できなかったところだったのです。

次に、④のウクライナ年表（概略図）をご覧ください。

表の一番上に、青地に黄色の文字でウクライナと書かれています。その下には、ウクライナの各地域が書かれています。ウクライナは複雑な歴史をもち、多様な民族が暮らしています。その各地域の欄の下に赤字で主要都市が書かれています。

②キエフ・ルーシ (12世紀中頃～13世紀初め)



③キエフ・ルーシ (12世紀中頃～13世紀初め) と現在のウクライナ



※赤い線で囲まれた部分が現在のウクライナの地である。

④ウクライナの歴史 (概略図)

世紀	主要な出来事 (事件はウクライナにおける 西暦順について)	プロヴィヤ チェルニウ ツィ	ウクライナ ツィ	西部【ハルィチ ナ】 リヴィウ	西部【ハルィチナ 以外】ルーツク、ジ ーメル、ヴァーニ ツァ	中央部 ドニエプル 右岸、チェ ルカースイ	東部 ドニエプル左岸 ボルザヴァ、 チェルニゴフ	ザポロジ エ、ザポロ ーシエ	東部【ド ンバス】 ドネツク、 ルガンスク	南部 オデッサ、 ヘルソン	クリミア モスクワ、 トルコ	ペラルーシ	ロシア (ヨーロッパ、 ロシアの一部)
~8	東スラヴ諸部族の定住 東方正教会(キリール)のスラヴへ の布教開始(863年) キエフ・ルーシ成立(882年)	アヴァール人、ボルガル人等 ハンガリー人	東スラヴ諸部族	東スラヴ諸部族	東スラヴ諸部族	東スラヴ諸部族	東スラヴ諸部族	東スラヴ諸部族	東スラヴ諸部族	東スラヴ諸部族	東スラヴ諸部族	東スラヴ諸部族	東スラヴ諸部族
9	正教がキエフ・ルーシの国教となる キリスト教の東西教会に完全分離 (1054年)	キエフ・ルーシ	キエフ・ルーシ	キエフ・ルーシ	キエフ・ルーシ	キエフ・ルーシ	キエフ・ルーシ	キエフ・ルーシ	キエフ・ルーシ	キエフ・ルーシ	キエフ・ルーシ	キエフ・ルーシ	キエフ・ルーシ
10	ヴァチカン公のキエフ占領(1169年) ハルィチ・ヴォ ルィニ公国 成立(1200年)	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー
11	モンゴル・タタールの襲来(1237年) キプチャク・ハン国成立(1243年)	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー
12	クレヴネの合戦(1385年)	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー
13	キプチャク・ハン国分裂、クリミア・ ハン国の成立(1487年)	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー
14	ルプリンの合戦(1598年) ユニエト成立(1598年) ヘトマン諸侯連立(1648年) ペレヤスラフ協定(1654年) アンドルウフオ条約(1667年)	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー
15	ボルゴワの戦い(1709年) 第1回ポーランド分割(1772年) クリミア、ハン国滅亡(1783年) 第2回ポーランド分割(1793年、 1795年)	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー
16	ハリコフ大学創立(1805年) キリロ・メトディイ一団団結(1846年) クリミア戦争(1853~1856年) オーストリア・ハンガリー(1867年) ウクライナ新憲法(1876年)	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー
17	第1次世界大戦(1914~1918年) ロシア革命(1917年) ソ連成立(1922年) ウクライナ化政策(1928~35年)	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー
18	大祖国戦争(1941~1945年)	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー
19	ウクライナ化再開(1993年) クリミアがロシアからウクライナへ 移管される(1964年) ウクライナ新憲法(1972年) チェルノブイリ原発事故(1986年) ウクライナ言語法成立(1989年) ユニエト合憲化(1990年)	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー
20	ウクライナ独立宣言(1991年) オレシジ革命(2004年) ロシア併合開始(2012年) ウクライナ・クーデター(2014年) ロシア併合開始(2014年) ロシアのウクライナ侵襲(2022年)	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー
21		ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー	ハンガリー

表の左には、主な出来事が年代順に書かれています。

9世紀を見ていただきたいのですが、このときにキエフ・ルーシが成立しました。キエフ・ルーシというのは東スラヴの諸部族を統一した国です。次に、12世紀を見ていきたいのですが、キエフ・ルーシが分裂傾向になってしまっています。その後、キエフ・ルーシの2か所が有力な地域になっていきます。その一つがウラヂーミルです。もう一つがハルィチ・ヴォルィニ（ハリチナーとヴォルィニ）というところですが。次第にキエフが没落していきます。そうこうしているうちに、モンゴル・タタールがやってきます。モンゴル人とタタール人の連合軍です。キエフ・ルーシがその支配下に置かれます。

14世紀の項目をご覧ください。14世紀、ルーシの西方は、弱体化していくモンゴル・タタールの目が届かない地域になり、その間にポーランドとリトアニアの支配下に置かれてしまいます。水色の部分です。この地域は、その後、ポーランドがリトアニアをのみ込んでしまいます。そして、18世紀までポーランド支配が続きます。

一方、ロシアは、モンゴル・タタールの侵攻前に栄えていたウラヂーミル（ウラヂーミル大公国）の一つの砦だったモスクワが力をつけていきます。そして、モンゴル・タタールを追い出します。モスクワ（モスクワ大公国）は、その後、ロシアを形成していきます。

ポーランド支配下の地域の話に戻ります。ポーランドに支配されていたのは現在の西ウクライナです。キエフの辺りまでです。18世紀末に、そのポーランドがプロイセン、オーストリアとロシアによって分割されます。高校世界史で学ぶポーランド分割です。プロイセンは、ポーランド民族が住むポーランドの中心部を支配し、オーストリアとロシアがポーランド支配下のキエフ・ルーシの故地を支配します。大部分はロシア帝国に領有されますが、西の端だけがオーストリアに支配されます。この西の端がハルィチナーという地域です。この地域は、第1次世界大戦後に、敗戦国オーストリアからポーランドに戻ります。その後、独ソ不可侵条約により、一時期、2年足らずの間、ソ連の支配下に入ります。しかし、独ソ戦開始後

すぐにナチスドイツに領有されました。そして、ハリチナーは、ナチスドイツの力を借りて独立を試みます。ナチスドイツのソ連侵攻に協力しましたが、独立は上手く果たせませんでした。この地域がソ連に併合されたのは、第2次大戦後のことです。ハリチナーは、最後に回収されたキエフ・ルーシの土地だったのです。

ハリチナーというのは、馴染みのない地名だと思います。英語とかロシア語ではガリツィアと呼ばれています。この地域は、ウクライナの中でもかなり特殊な地域です。特に、宗教的に。ポーランドと言えば、熱心なカトリック国ですね。ハリチナーは、14世紀の段階でポーランドに支配されたところですよ。リトアニアではなしに。最初からずっとポーランドの支配下と言ってもいいところですよ。ですから、カトリックの影響力が大きいのですよ、ここは。

ロシアに話を戻します。ロシアは第1次世界大戦中に革命が起こりました。ロシア革命です。しばらくして、ソ連邦が成立しました。その時、ロシア帝国の領土は、ほぼそのままソ連邦に受け継がれていきます。ソ連邦には、15の共和国がありました。実質は、国というよりも行政区画のようなものです。この15共和国の中に、ソ連ウクライナ共和国というのがあって、それが、ソ連邦崩壊のとき、そっくりそのままウクライナという国家になったのです。民族分布を考慮に入れず、ウクライナという国家が生まれた。こんな風に、棚ぼた式にウクライナという国家ができました。

先ほども申し上げましたが、ソ連ウクライナ共和国が成立する前に、ハリチナー地域だけで独立しようとしていたのです。そのときにナチスドイツの協力を求めているのですよ。それで、ナチスドイツと一緒にあって、東ウクライナやベラルーシを侵略したという歴史があります。プーチンがクーデター後のウクライナ政権のことをネオナチという源がここにあります。

ここまでの地理と歴史の復習でした。特におさえておきたいのは、東ウクライナや南ウクライナは、キエフ・ルーシの域外であり、人が住まない「荒野」と呼ばれていた土地だったということです。そこをロシア帝国が

領土にし、ロシア人を入植させました。そのため、ロシア人が多く暮らすところとなったのです。ロシア語地域でもあります。現在、そこがロシアに攻撃されているのです。何か理解に苦しむところなのですが、またこのことも後で触れます。

○**司会** ここまでのところで何か質問があれば承ります。いかがでしょうか。

よろしいですか。

○**寺田氏** ハターエヴァ先生を御紹介いたします。ハターエヴァ先生は、ウクライナ中央部にあるクレメンチューク市の御出身です。キエフの南東250キロメートルに位置しています。ドニエプル川左岸、流れに向かって左岸ということなので、東岸と言っても良いと思います。ここはウクライナ語とロシア語のバイリンガル地域です。しかし、ロシア語のほうが優勢なところでは。

ハターエヴァ先生は、北海道大学大学院で博士号を取得され、2022年夏まで北大の国際部国際連携課の特定専門職員として勤務されていました。秋以降、金沢大学の国際機構専門業務職員として、勤務されています。

今回は、「ウクライナの木造教会堂建築 ― 歴史的背景及び構成上の特質 ―」という題目でお話しいただきます。金沢からのリモートでのご発表です。

○**司会** では、ハターエヴァ先生、よろしく申し上げます。

講演2 「ウクライナの木造教会堂建築 — 歴史的背景及び構成上の特質 —」

ハターエヴァ・テチャーナ

○ハターエヴァ氏 はい、分かりました。

皆さん、改めまして、テチャーナ・ハターエヴァと申します。よろしく
お願いします。

本日、ウクライナの木造教会堂建築を紹介させていただきます。特に、
その歴史的な背景及び構成上の特質について見たいと思います。

歴史的な背景ですが、
先ほど、寺田先生がお話
の中で、非常に細かく分
かりやすく、ウクライナ
という国家の歴史につい
てご説明がありました。
今、ご覧いただいている
のは、主に木造教会堂建
築に関連のある重要な出
来事をピックアップした

988年	キエフ・ルーシ国家のキリスト教化
996年	十分の一税教会堂 完成
1011年	聖ソフィア大聖堂の建設着工
1240年	タタール軍の襲撃を受け、キエフ市陥落、多数の 木造教会堂が焼失、十分の一税教会堂破壊
1428年	現存最古の木造教会堂の建設
1654年	ペレヤースラウ会議 東部ウクライナはロシアの 支配下に、西部ウクライナはポーランドの支配下 に置かれる
1841年	「ロシア教会会議」は平面プランを定め、他のプラン の使用を禁止。建設済みの教会堂も改造される
1917年	10月革命、宗教迫害の時代が始まる
1991年	ソビエト崩壊、ウクライナの独立
2018年	ウクライナ正教会 設立

スライドです。もちろん、それは、全てというわけではなくて、そのほか
にも様々な歴史はありましたが、今日は時間のこともありますので、一番
大事な部分について簡単にご説明させていただきたいと思います。

まず一つ目に、988年、キエフ・ルーシ国家のキリスト教化についてで
す。国家として、ウクライナがキリスト教化された、非常に重要な出来事
です。キリスト教化以前の時代における宗教は、多神教でした。多数の神
様、雷の神様、森の神様がいて、ウクライナ人は、日本の神道に近い形で

多神教を信じていました。その当時の公のヴラヂーミルは、自分の権力を支えるために、イデオロギーが重要だと考え、ビザンチン帝国（東ローマ帝国）からキリスト教を受け入れます。そのことは、非常に重要な政治的な判断でしたが、それについてお話しすると非常に話が長くなってしまいます。まず、10世紀末に、キエフ・ルーシ国家がキリスト教化されたということを知っていただければと思います。

キリスト教化されると、当然、教会堂の建設が始まります。996年に完成した十分の一税教会は最古の教会として知られています。十分の一税教会堂は破壊され、現在、何も残されていない状態です。

次に紹介したいのは、聖ソフィア大聖堂です。キーウにある聖ソフィア大聖堂という教会堂は、1011年に建設着工されました。実はその建設開始の年について様々な説があります。つい最近までは1037年が主流の仮説でした。現在でも聖ソフィア大聖堂の建設をめぐる仮説はただの仮説であり、誰もが信頼できるような史料や年代記などは、ありません。研究者、歴史学者によって見方や解釈が異なりますが、長い間、1037年が主流でした。最近では1011年ではないかという説をサポートする専門家が非常に増えて、1011年説が採用される場合が多いです。2011年9月21日に、聖ソフィア大聖堂建設1000年記念祭という非常に大きなイベントがありました。

ここで重要なのは、十分の一税教会堂も聖ソフィア大聖堂も石造であり、木ではなくて、石とレンガを使った工法で建てられた教会堂であるということです。多神教からキリスト教に変わると、新しい宗教施設を建てる職人が必要です。そのために、ビザンチン帝国から職人たちがウクライナに来て教会堂を建ててくれるのですが、その職人たちが使い慣れていたのは、石とレンガでした。しかし、その当時、キエフ・ルーシの住宅建築は、基本全て木造で、現地ウクライナの大工や職人たちにとって最も使い慣れている材料は木だったので、後に、教会堂も木で建てられるようになります。

時代はどんどん進み、1240年にモンゴル・タタール軍の襲撃を受け、キーウ市が陥落します。陥落した時、キリスト教化から既に250年ぐらい時間

が経っているので、その間、多くの木造教会堂が建てられたと思われます。たくさんあったはずの木造教会堂ですが、モンゴル・タタール軍の襲撃によって多数の木造教会堂が消失してしまい、先ほどお話した十分の一税教会堂も破壊されました。しかし、聖ソフィア教会堂は無事でした。現在、一番古いとされている木造教会堂は1428年のものです。

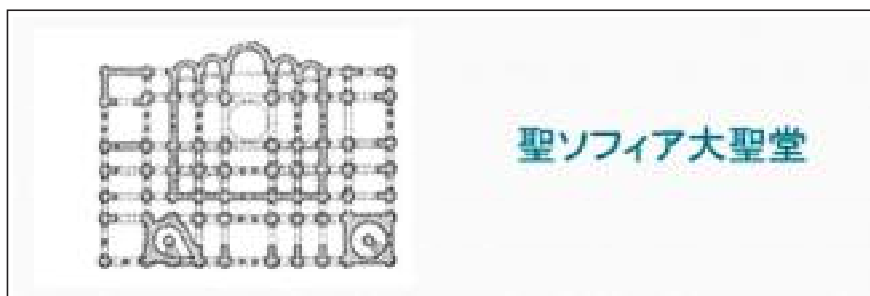
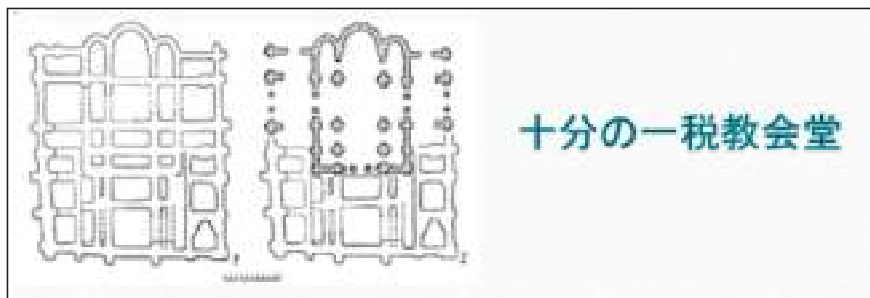
次に触れたいのは、1654年のペラヤースラウ（ペレヤスラフ）会議です。その会議の結果として、ヘトマン国家（ウクライナ・コサックの国家）がロシアの支配下に入りました。暫くの間、ロシアの支配下に置かれた地域には、自治権がありましたが、その後、併合され、完全にロシアに飲み込まれてしまい、ロシアの一部になってしまいました。同時に、西部ウクライナはポーランドの支配下に置かれたままになりました。ここは非常に大きな分岐点でした。ポーランド（カトリック国）及びロシア（正教国）の影響は、教会堂の様式や平面プランにまで及びました。その影響がどのような形で現れたかについて、後で説明しますが、まず、この年代を覚えていただければと思います。

次に注目したいのは、ロシア教会会議という会議が行われた1841年です。その会議で、教会堂を建てる際、適用すべき平面プランが決まりました。キリスト教化以降、1000年ぐらいの年月をかけ、形成されてきたウクライナ独自のスタイル、伝統的な平面プランの使用は禁止されました。さらに、既に建てられた教会堂は改造の対象になりました。

次に触れたいのは、1917年の十月革命以降に始まった宗教迫害の悲劇的な時代です。その時代は、1991年のソビエト崩壊まで続きました。そして、5年前の2018年にウクライナ正教会の設立という非常に大きな出来事が起こりました。この設立をもって、モスクワの東方正教（ロシア正教）から完全に独立したウクライナの正教会が誕生しました。

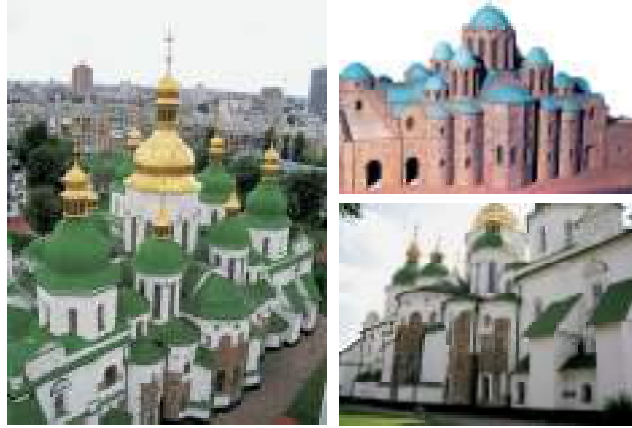
次ページにあるヴァスネツォフの二枚の絵ですが、この絵は、19世紀に、キーウ市内にあるウラジーミル大聖堂のフレスコ画になっております。右側は、ウラジーミル公の洗礼の様子です。左側は、キリスト教徒になったウラジーミル公がキーウに戻った後、彼の立ち合いのもと、キーウ市民が

洗礼を受ける様子です。この出来事を記念する日として、7月28日がウクライナでキリスト教化記念日となっております。右下の写真は、キーウ市内にある、ウラジーミル公が十字架を手に持っている銅像です。一般市民が洗礼を受けたとされているドニエプル川を見下ろす丘の上に立っています。

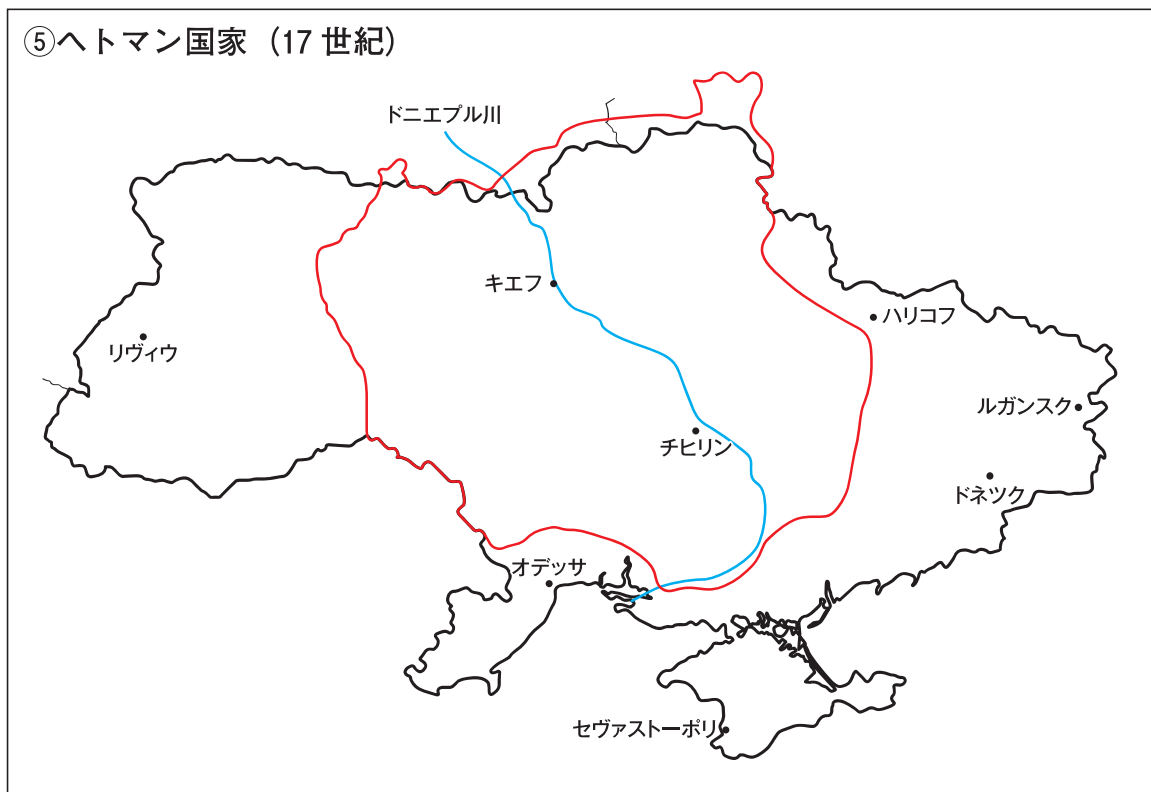


前ページの国は先ほどお話した十分の一税教会堂と聖ソフィア大聖堂の平面プランです。この様式はビザンチン様式と言います。ビザンチン帝国において主流だった建築様式です。先ほども説明したように、ビザンチン帝国から来た職人たちは、この様式で教会堂を建てることになりました。

聖ソフィア大聖堂を見ると、現在の形は、昔とは異なり、様々な装飾が施され、屋根の形状も変わっています。これは、18世紀にバロックというスタイルが人気になって、バロック風に改造されたのです。もともとの形は、右上の絵のような形でした。ビザンチン様式そのものです。



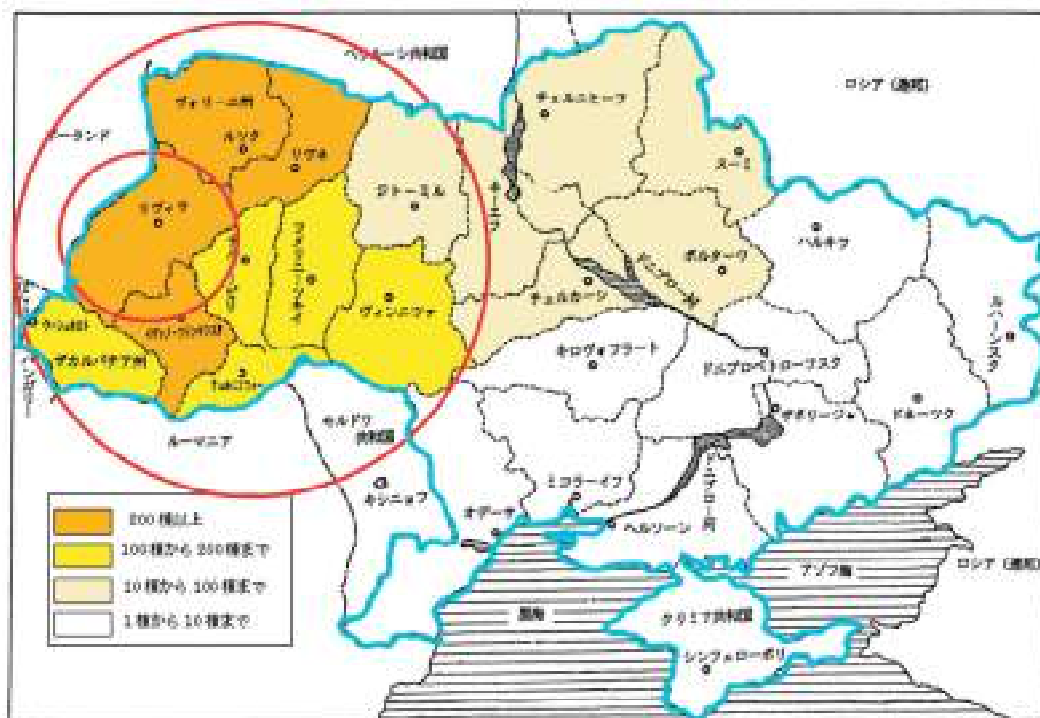
ここで、1654年のペラヤースラウ会議に戻りたいと思います。⑤の地図を見ていただくと分かりやすいと思います。



※赤い線で囲まれた部分がヘトマン国家（17世紀）の地である。

ヘトマン国家（ウクライナ・コサックの国）は、ロシアの支配下に置かれることになりました。一方、左側にある西ウクライナ、例えば、ハリウチナー（中心都市はリヴィウ）などは、ポーランドの支配下に置かれたままになりました。この状況が木造教会堂の様式にどのような影響があったかということについて後ほど説明します。

では、ウクライナ全土に現存する木造教会堂の分布を見てください。その数は、2500棟です。実は、この2500という数はちょっと古いデータです。また、皆さん御存じのように、今、戦争中です。残念ながら、この数は少なくなっていくと思います。

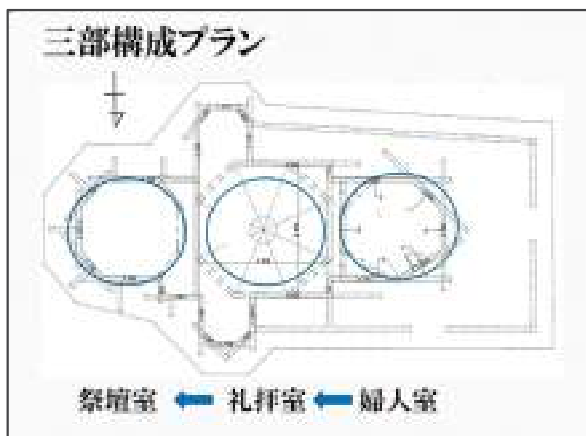


この2500棟のうち1900棟は西部ウクライナにあります。大きい円で囲まれている地域は、西部ウクライナです。その中に、小さい円があります。それはリヴィウ州です。そのリヴィウ州だけでも815棟の木造教会堂があります。西部ウクライナに集中して現存している理由として、まず、西部ウクライナに位置するカルパティア山脈が木材豊富な地域であることが挙げられます。また、カトリックの影響で、教会堂の建設に非常に力を入れていました。さらに、様々な紛争から地理的に離れた地域だったということもあって、たくさんの木造教会堂が残りました。

次に、ウクライナ木造教会堂の基本構成を紹介します。その構成には、三部構成プランと十字形プランという基本的な二つのプランがあります。

伝統的な木造教会堂の構法は、校倉造りです。校倉造りは、簡単に言うのと、ログハウスみたいなもので、木材を水平にして重ねていく構法です。その木材が交差している仕口の切り込みによって、木がしっかりと組み上げられていきます。

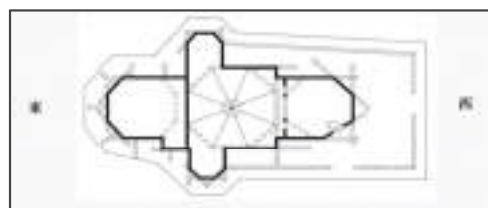
校倉が教会堂の構成の単位になって、その三つが一行に並ぶのは、三部構成プラン(下図)です。入口のドアが西側にあります。三つの青い丸で囲まれているのはそれぞれの単位(部屋)になっており、それぞれに名前がついています。その入口の部屋は婦人室、真ん中の部屋は礼拝室、一番東側にあるのは祭壇室です。祭壇室は祭壇が置かれている部屋で、真ん中の礼拝室と祭壇室との間に壁があります。イコノスタシスがその壁にあって、礼拝室で礼拝が行われます。婦人室は、玄関間みたいな部屋です。昔、女性と男性が別の部屋で礼拝に参加することになっていて、婦人室は女性のための部屋でした。さらに、まだ洗礼を受けていない人は、この婦人室に集まって、礼拝を聞いていました。



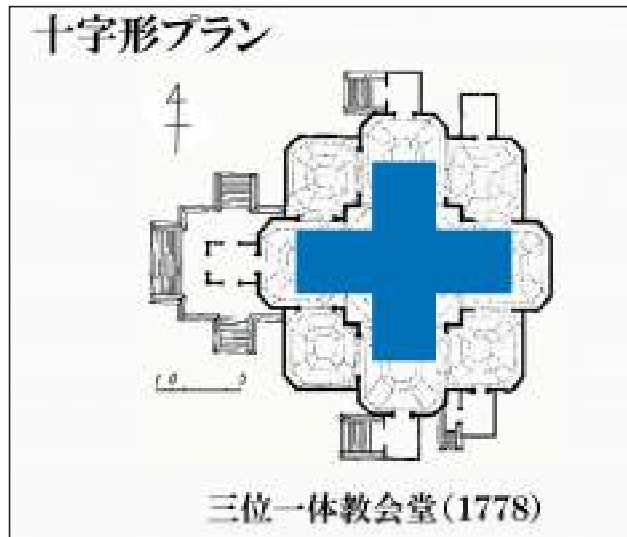
外観の写真を見ていただきます。これは、リヴィウ州のドロゴビチ市にある聖ユーリイ教会堂です。三部構成プランであり、外観からそれぞれの部屋の位置が確認できます。



次に、二つ目の十字形プランです。形を見ると十字になっています。校倉の数は少なくとも五つ以上です。三位一体教会堂は、唯一、九つの部分からできてい



ます。この教会堂は現存しており、内部から塔の中の様子も見る事ができます。ウクライナの木造教会堂の特徴の一つは、内部が繋がった空間になっていることです。



この繋がった空間は、「ザロム」という工法により作られています。ザロムとは、階層ピラミッド状の多層式塔を造るときに、ピラミッド状に段差を造っていくやり方です。ザロムの機能の一つは、開放的な内部空間を作ることです。先ほど、三位一体教会堂を御覧になったのですが、その繋がっている内部空間が非常に特徴的です。



木造教会堂と言えば、特にロシアを研究していらっしゃる皆さんは、カレリアにあるキジ島の教会をすぐに思い浮かぶと思います。その外観はウ

クライナの教会堂に似ているかもしれませんが、中に入ったら、低い天井があって、塔の中の様子を見ることはできません。このザロムはウクライナの木造教会堂にしか見られないような工法です。

また歴史の話に戻りますが、1841年のロシア教会会議では、ロシア様式という教会堂のスタイルが決まり、それ以外のスタイルで教会堂を建ててはいけないという会議決議がありました。右の教会堂が、まさに、そのロシア様式で造られた教会堂です。形が非常にシンプルなロシア様式は、婦人室の上に必ず鐘楼（鐘塔とも言う）があり、礼拝室の上に塔が一つだけあることが特徴的です。一方、ウクライナの伝統的なスタイルは全く違います。



下はウクライナ独自のスタイルで、どんどん上に伸びていくような姿がウクライナの木造教会堂の特徴です。



内部の空間が上に伸びていくような構成は、17世紀後半から18世紀後半まで主流だったウクライナ・バロック様式の特徴でもあります。聖ソフィア大聖堂の今の姿は、ウクライナ・バロック様式によるものです。そ

の特徴としては、塔の形状の多様化、庇や回廊の設置とそれらの装飾が挙げられます。ヨーロッパ・バロックに比べると、ウクライナ・バロックの装飾はちょっと控え目です。



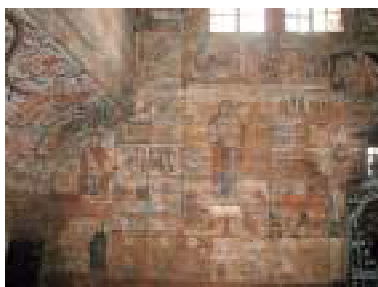
先ほど、聖ユーリイ教会堂の外観を見ていただいたのですが、その細部を見ていくと、ウクライナ・バロックの特徴的な細かい装飾を見ることができます。



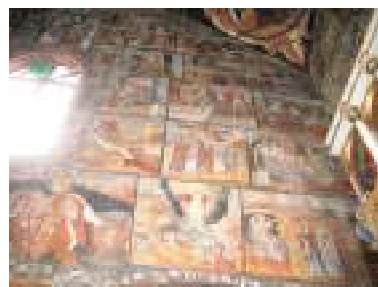
ウクライナの木造教会堂建築は、ヨーロッパの木造教会堂建築にも見られる要素があります。校倉造りの教会堂はウクライナ以外に、ロシア、フィン

ランド、スウェーデン、ノルウェーなどの国にもあります。また、くぎを使わない建築法もウクライナ独自の工法ではありません。しかし、「ザロム」という塔の工法はウクライナの木造教会堂のみに見いだされる特徴です。

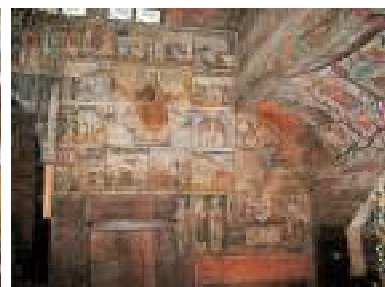
皆さん、恐らく、内部の様子も気になるかと思いますが、最後に、聖ユーリイ教会堂の内部をお見せしたいと思います。この聖ユーリイ教会堂は、内部空間にある木製の壁の上に壁画が施されているとても素敵な教会堂です。隙がなく、下から上まで、きれいな壁画が良い状態で残されています。



「アカティスト賛歌」
図像サイクル



「キリストの受難」
図像サイクル



「キリストへの賛歌」
図像サイクル



「最後の審判」 図像 1



「最後の審判」 図像 2



「使徒の殉教」

ウクライナの木造教会堂建築の歴史的で質的な価値が認められて、2013年、右記の8棟の木造教会堂がユネスコの世界遺産に登録されました。聖ユーリイ教会堂もその中の一つです。



興味があれば、ユネスコのホームページを見てください。

御清聴ありがとうございました。

○司会 はい。ありがとうございます。

時間が限られますけれども、質問があれば承ります。

○質問者 興味深いお話をどうもありがとうございました。

ロシア国内では、教会の中に石造りの教会と木造の教会が同じ教会内で建っている場合があります。ウクライナではいかがでしょうか。

石造りの場合には、冬、寒くて、とてもじゃないけれども祈祷をすることができないので、冬は木造教会でお祈りをささげると聞いたことがあります。

ウクライナでは、石造りの教会と、それから、木造の教会が、同じ敷地の中に建っている例はありますか。

○ハターエヴァ氏 皆さん、ごめんなさい。(ZOOMの不調で) 聞こえな

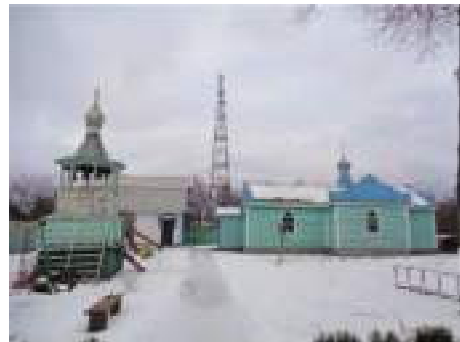
いです。

○**質問者** 後ほどご回答ください。

○**司会** すみません。ハターエヴァ先生には、後ほどご回答いただきます。

[講演終了後、ハターエヴァ先生からメールにて下記のようなご回答があり、質問者の方にメールでお伝えした。機器の設定の不備により、ハウリングが発生してしまった。会場の聴衆の皆さん、ハターエヴァ先生、質問者の方にはご迷惑をおかけした。今後は機器の設定に最善を尽くしたい。]

○**ハターエヴァ氏** 確かにウクライナにも夏の教会と冬の教会を作って、季節によって使い分ける場合があります。しかし、夏の教会は木造で、冬の教会は石造という決まりがなく、どちらも木造で、大きさだけが違う場合が多いです。2枚の画像を添付いたしますが、どちらも木造で、同じ敷地内にある夏教会と冬教会です。



講演3 「ウクライナにおける ロシア語とウクライナ語」

ベイ・リュドミーラ

○寺田氏 発表者はハリコフ大学元准教授のリュドミーラ・ベイ先生です。ハリコフ大学で教鞭を執られていた方です。長らく外国人留学生にロシア語やウクライナ語を教えられました。その後、ウクライナ学という一般教養科目をウクライナ人学生に教えられました。



2022年2月24日のロシアのウクライナ侵攻以降、ベイ先生は、砲弾が飛び交う中、しばしば防空壕へ避難しながら生活を送られています。そんな中でも継続的に現地報告を届けてくださっています。

簡単な質問をすると、A4で20枚くらいの分量で回答が来ます。何か書いていないと落ち着かないそうです。

彼女が暮らすハリコフ市の北部のサルトフカ地区は、かなり被害を受けています。実は、私も2005年に3か月程、そのサルトフカに住んでいました。私が住んでいたアパートはもう破壊されてしまっているそうです。北サルトフカというところは、被害がもっとひどく、ほとんど皆、別の場所へ避難したそうです。

今回は、幾つかある彼女の現地報告の中から、「ウクライナにおけるロシア語とウクライナ語」というタイトルの報告を御紹介します。

大変な困難の中にいらっしゃるということ、インターネット環境が劣悪なこと。1日のうちにインターネットを使える時間が限られているとのこと。そのような状況なので、現地からの映像は御紹介できません。そのため、

インターネット環境が良いときに送ってくださった写真を御紹介します。

報告の言語はロシア語だったのですが、それを私が翻訳して代読させていただきます。まず、写真を見ていただきます。



2010年の
平和なハリコフにて



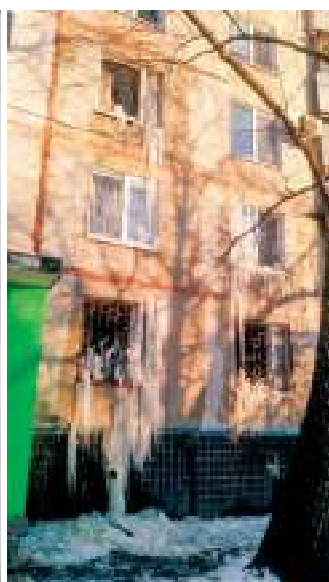
サルトフカ地区から少し離れたところにある集合住宅



自宅窓からの景色



隣の集合住宅



向かいの集合住宅



ベイ先生 (2022年春撮影)

左上は、2010年の平和なハリコフです。ベイ先生と知り合ったのは、それよりも20年前、まだソ連邦があった頃です。その下は、初夏ぐらいの撮影だと思います。ベイ先生の自宅の窓からの景色です。爆撃があったところです。右上はサルトフカ地区からちょっと離れたところです。砲弾が当たってます。ベイ先生の隣の集合住宅にも当たりました(左下)。向かいの集合住宅にも当たりました(中央下)。こんな中でベイ先生は生活されています。本当に危ないときは、離れたところに避難されているとのこと。しかし、ほとんどは自分のアパートに帰られています。右下は2022年の春先です。

それでは代読させていただきます。である調で読ませていただきます。時々、コメントを加えていくことにします。

※なお、寺田のコメントは [] で括られている。

【外国人留学生と教育言語】

今、戦争が行われている。そんな時に外国人がウクライナへ留学することはないだろう。多くの留学生担当教員は仕事がなくなってしまうだろう。在学している外国人学生が学業を続けることに同意してくれるとしたら、教員にとっては幸いなことであろう。しかし、戦争中の国で効果的な学習ができるだろうか。外国人学生の大半が学んでいたのは、今、戦闘が行われているウクライナの東部と南東部に位置する大学なのである。

[さっき地図で見たところですね。昔、キエフ・ルーシではなかったところですね。その、ウクライナの東部と南東部で戦闘が行われています。ほぼ全域でロシア語がもっぱら話されています。]

戦争以外にも外国人学生を集めることが困難であるもう一つの理由がある。すなわち、地域を問わず、全ての高等教育機関において、学習内容のウクライナ語への翻訳が必須である。

[私, 結構, ウクライナに行っています。1997年から。長期滞在は1999年, 2004年, それから2010年です。2010年ころ, ハリコフ大学の授業はウクライナ語でやっていました。でも, 外国人留学生は, 分からないですよ, ウクライナ語はほとんど勉強していないので。しかし, ウクライナ語で教育しなさいというお達しがくるわけです, 国のほうから。それで, ウクライナ語で授業をしていたそうです。でも, 学生は理解できずにぼかんとしていたので, 先生方は, もう一回, ロシア語で授業をするという, 二度手間をやっていたということです。それが, 2004-2005年のオレンジ革命で生まれたユーシチェンコの政権がやっていたことです。]

大多数のウクライナの学生にとって, これは問題ではない。我々(ウクライナ国民)は, 皆, ウクライナ語を学校で学んできた。また, 子供たちは今学んでいる。ウクライナ語で書かれた文学や新聞, 雑誌を自由に読み, ウクライナ語のテレビ番組や映画を見る。実際, ウクライナの住民の大半は何らかの程度にロシア語とウクライナ語を習得しているバイリンガルである。

[何らかの程度ですね。ロシア語のほうが得意だけれど, ウクライナ語もわかる。ウクライナ語のほうが得意だけれども, ロシア語もわかる。他にもいろいろなケースがあります。]

しかし, 外国人にとって, ロシア語地域(例えば, ハリコフ, ドニエプロペトロフスク, ザポロージェ, オデッサ, クリヴォイ・ローク, ヘルソン, ニコラーエフ, さらに, キエフ, クリミア)での学習は困難を伴う。なぜならば, 毎日の生活の至るところでロシア語が聞こえるし, ロシア語でコミュニケーションを取る必要があるからである。私は, これ以上, ロシア語の重要性, 汎用性, さらに, 外国人が大学卒業後にロシア語を利用する可能性などについては, これ以上話さない。

【ロシア語排斥】

ここ数年、国家レベルのロシア語排斥が意識的に行われてきた。学校や高等教育機関、官公庁、企業において、また、日常のコミュニケーションにおいて、例えば、ウクライナ全土で、店舗（所有形態にかかわらず）の従業員はウクライナ語で顧客と対応することを義務づけられている。そして、この決まりに違反する従業員を罰金や解雇で脅している。ロシア語地域、例えば、ハリコフなどにとって、これはロシア語禁止を意味する。少数民族が暮らす地域（ブコヴィナ、ザカルパチアなど）においても、母語であるチェコ語、ルーマニア語、ブルガリア語などを公的サービスの場（役所、店など）で使用することが禁止されている。ハリコフなどの都市では、スーパーの販売員やレジ係がロシア語を使用したということで、警戒心の強い顧客が警察に訴えるケースも多くあった。その結果、何人かの販売員が無職となった。しかし、ハリコフの住民はロシア語でコミュニケーションをとってきたし、現在もロシア語でコミュニケーションをとっている。

ハリコフでもウクライナ語を話す通行人が現れ始めた。彼らの多くは、そのポーランド・ハリチナー訛りから、西ウクライナからやってきた人たちであると分かる。

[ベイ先生からこの報告があったのは、去年の9月2日でした。この出来事は、そのちょっと前のことだと思います。夏の終わりぐらいですね。ウクライナ語の標準語はポルタヴァ方言を基にしています。ポルタヴァというところは、長い間、ロシア帝国とソ連邦の影響のもとに、ロシア語が話されていた地域です。一方、実際に日常生活でウクライナ語がもっぱら話されていたのは、ハリチナーです。そのハリチナーのウクライナ語というのは、700年ぐらいの間、ポーランドに支配されていたので、非常にポーランド語化されています。]

そういった人たちだけでなく、日常のコミュニケーションにおいて、愛国的にウクライナ語へ言語を切り替えている生粋のハリコフっ子もいる。

これらのすべての現象が顕著に現れ始めたのは、「ウクライナ語の国家

語としての機能保障法」という法律が2019年7月に発効されたことと関連している。この法律が保障しているのは、ウクライナにおける唯一の国家語であるのはウクライナ語であり、国家全土における、国家機関、社会生活の領域に必須であるということである。この法律に従えば、国家語は、教育、医学の領域、労働関連や消費サービスの領域、さらに公衆に供される行事、宣伝などの領域において用いられなければならない。これ以外にも、この法律は、要人たちが国家語を習得し、職務を果たす場合に国家語を使用することを義務づけている。

[ゼレンスキー大統領は、ロシア語話者なのですけれども、必死にウクライナ語を勉強しました。以前、ティモシェンコという政治家がいました。彼女もロシア語話者なのですけれども、ウクライナ語を勉強していました。しかし、ヤヌコーヴィチ元大統領は全然ウクライナ語を勉強しませんでした。いろいろな人がいます。]

しかし、この法律の効力は個人的なコミュニケーションや宗教儀式を行う際には広がりを見せていない。

ウクライナの国家語であるべき言語がウクライナ語であるということには、誰も異議を唱えないであろう。ボランティアグループ「自由の空間」や「ウクライナ語で学べ」のモニタリング結果によると、この言語法は、ウクライナの全域で支持されている。西部住民の88%から南部住民の53%まで、多くの支持を集めている。

[このアンケートは、多分、東ウクライナでは統計を取っていないと考えられます。]

戦時中の今、ウクライナを防衛する者（ウクライナ軍や地域防衛隊）の中には、ウクライナ語話者もロシア語話者もいるので、言語問題の激しさは日常レベルでは低下したが、一方、国家レベルでは強まった。

[テレビの取材を受けるウクライナ兵たちはもっぱらロシア語をしゃべっています。]

西ウクライナでは、ロシア語は敵の言語、侵略者の言語と呼ばれ始めた。ウクライナの領土内で戦争が行われていることによって、今年（2022年）の9月1日から、多くの学校はロシア語を学校の教科から除外している（これを支持しているのが文部科学大臣セルゲイ・シカルレロ）。ただし、親たちは学校当局にロシア語を選択科目とするよう訴えることはできるようであるが。一方、高等教育機関では「ロシア語」や「ロシア文学」の専門が閉じられ、大学ではロシア語やロシア文学史の講座が閉じられている。特に、ハリコフの二つの大学（ハリコフ大学とハリコフ教育大学）では、該当する講座が「スラヴ諸語」、あるいは、「外国文学」の講座に含められてしまい、事実上、廃止された。以前であれば、父母会、教育界、学会が、このようなアプローチに反対の意を述べ、母語で話すことや母語で教育を受けることを禁止するといった言語差別について申し立てることができたが、今、戦争の状況下では不可能となった。

要するに、言語問題は決して副次的な問題ではないということが判明したと。

【言語問題】

私は、2000年代の初頭から、言語問題の進展に関心があったので、ウクライナの様々な地域の住民、生徒、学生の間で、ロシア語とウクライナ語がどのように話されているのか、つまり、言語分布の諸問題を研究し統計資料を調べた。そして、このテーマの論文を書き、学会で発表した。事実と統計を基に検討すると、ロシア語の排斥やロシア語の使用範囲制限が、ここ25～30年の間に、意識的に、意図的に行われたとすることができる。ロシアを敵の表象とするかのように。特に2014年の事件（クーデター）の後。国家のこのような政策と社会の一部のロシア語に対する攻撃的な立場は、実際に、ウクライナの多くの地域間で憎悪を引き起こした。ロシア語話者としてのロシア民族への憎しみ、さらに、ロシアとは距離を取ろうと

する志向に火をつけた。しかし、ウクライナに対するロシアの行動も同様に、激しい感情に火をつけることに大いに貢献した。

ここ数年の統計調査のデータを見てみよう。最新の国政調査は2001年に行われた。そこでは、母語と日常使用言語についてのアンケート項目があった。その後、2001年以降、国勢調査は行われていないのだが、様々な社会学的調査センターがアンケートを行ってきた。そして、我々はその数値を活用することができる。しかし、活用の際には、様々な理由によってアンケート結果に特徴が出てくるということを留意しておくべきである。

- ① 誰がそのアンケートを企画したか。その企画者はどのような結果を待っているのか。
- ② ある状況下で、人は思っているとおりのことではなく、そうあるべきことを答える。
- ③ 人々の意見は、しばしばマスコミに左右される。特に左右されるのはテレビ放送である。現在、12のチャンネルが同じ情報を報道している。これは、24時間実況放送「ニュース・マラソン」と名付けられている。
- ④ 人々は状況に応じて日和見主義的に答える。誰がアンケートを行っているか、何を聞いたがっているのかに左右される。

ここ数年、アンケートは電話回答で行われている。回答者は1000人程度であり、それを超えて2000人になることはまれである。そのため、得られたデータの信頼性には疑問が残る。

言語使用は、自分をウクライナ人（ウクライナ民族）と認識しているか、あるいは、ロシア人（ロシア民族）と認識しているかということによって、大いに左右される。これらのエトノスの発生の歴史に深く立ち入ることはせず、ウクライナの住民の非単一性（多エトノス性）を説明する歴史的事実を言及するだけにしよう。

左岸ウクライナは、400年以上の間、ロシアと関係があった。

[左岸ウクライナとは、ドニエプル川よりも東の地域です。ドニエプル川は黒海に流れ込むので、川の流れから見て左は東側です。]

一方、右岸ウクライナ（ドニエプル川よりも西の地域）の多くの土地は、リトアニア大公国、ポーランド、オーストリアの支配下にあった。手から手へと、次々に所属が移った。左岸ウクライナのうち、主にウクライナ東部や南東部に居住しているロシア人は、自分たちを土着の住民とみなしており、自分たちの母語で意思疎通を図ったり教育を受けたりする権利があると思っている。しかし、現在の国家の制度・方針では、土着の民族に属するのはウクライナ人と、なぜか、クリミア・タタール人だけである。他の残りのエトノスの人たちは少数民族の中に入れられている。

[少数民族の中には、ハンガリー人、ブルガリア人、ルーマニア人などがいるし、それに加え、圧倒的多数の話者のいるロシア人も含まれています。]

人口地図は、ソビエト連邦の崩壊時から、特に2014年から大きく変化した。近年の統計調査では、クリミアやドンバスといった地域は対象に含まれていない。

2001年の国勢調査によると、ウクライナの人口の17%がロシア人（エトノス）だった。ロシアによるクリミアとウクライナの東部州の一部の占領後、自分をロシア人と認識している回答者数は、2014年に11%にまで減少した。そして、徐々に減少傾向が続いている。社会学的調査グループ「レイティング」(Rating Group Ukraine)による2022年の4月の調査データでは、自分自身をウクライナ人と認識する者が92%、ロシア人と認識するものが5%、また、3%の回答者は自分たちを他のエトノスと認識している。

それに対して、社会学やマーケティングの分野で権威のあるキエフ社会学国際研究所(KMIS)とラズムコフセンターの2020年の調査データによると、ウクライナ語が母語であると思っている回答者が73.4%、ロシア語

が母語であると思っている回答者が22%、他の言語が母語であると思っている回答者が1.7%である。しかし、家でウクライナ語のみでコミュニケーションをとっているのは53%のウクライナ国民だけであり、ロシア語でコミュニケーションを取っているのは15%のウクライナ国民。ウクライナ語とロシア語を同程度に使っているのは15%のウクライナ国民である。

社会学グループ「レイティング」によって、戦時下に全国規模で行われたウクライナ人の愛国主義傾向の強い調査の一つがインターネット上で2022年8月23日に公開された。

そのアンケートの結果は戦争前とやや異なっている。例えば、76%がウクライナ語を母語であると記入し、19%がロシア語を母語と記入した。その際、日常、ロシア語を話している人の30%がウクライナ語を自分の母語であるとみなしている。すなわち、それは、おそらく、民族的にウクライナ人に属するウクライナ国民なのであろう。だから、彼らはウクライナ語を母語と言っているのであろう。

家庭でロシア語よりもウクライナ語を頻繁に使用する人の数は増え続けている。今日では、51%の人が家でウクライナ語を話していると回答し、3分の1が両言語で、13%がロシア語で話していると回答している。ロシア語話者が両言語話者へ移行しつつある。南部と東部の住人の半数以上がバイリンガルであり、4分の1がロシア語のモノリンガルである。日常生活でロシア語だけを使用する人は約2分の1に減少した。

私は、公開されたアンケート結果を絶対視しない。なぜならば、これらの回答結果が1000人規模の回答者から得られたものだからである。

我々が、今置かれている状況では、社会的に望まれる回答がありうる。つまり、考えていることと回答することとが異なる場合である。しかし、これは、あらゆる社会学的アンケート調査にとっても問題である。回答者が誠実か否かということと、さらに、現在の政治状況に同調したいと思う気持ちが言語に関するアンケートの調査に影響を及ぼしている。

母語というのは、民族の言語であるだけでなく、家庭で会話したり、日

常生活でコミュニケーションをとったりする言語であると考える立場を私は支持する。後者は必ずしも民族的な所属に限定されない。

ウクライナでとても多い混血の家庭についてはどう言えばいいのか!? そのような家庭では、アイデンティティと家庭での言語使用とは、おそらく、以下のことに左右されるであろう。

「どの民族の文化の中で世界観が築かれ、また、その中で、その人自身が『気持ちがいい、快適である』と感じているか」

ウクライナ国民にとって、民族的アイデンティティと言語の使用はかなり複雑であることが分かった。おそらく、そのため、言語問題はウクライナ社会において衝突の原因となったのであろう。しかし、もし国家政策が言語問題を熱くしなければ、庶民にとって言語問題が躓きの石にはならなかったであろう。

私は、単一の国家言語（ウクライナ語）の支持者である。しかし、他のエトノスがコンパクトに普及している地域では、国家語以外にも、コミュニケーション全般において、その地域の民族語を使用する権利があると思う。

私の考えでは、いかなる法律も、ロシア語を母語とする人たち、あるいは、ロシア語が家庭の言語であり日常のコミュニケーションの言語としている人たちに、「明日」からロシア語を話すのをやめさせることはできない。言語問題において、思慮分別のある国家政策は、ウクライナ語の使用範囲を広げるための好ましい諸条件を作り出すことを基礎としていなければならない。しかし、民族語（その中には、ウクライナ語に次いで広まっているロシア語も入る）を圧迫したり排除したりすることはあってはならない。

【寺田吉孝による補足】

ウクライナ国内のかなり多くの都市や村を訪問した経験があります。ウクライナの統計資料にある言語状況と実際に現地を歩いた折に耳にした言語状況とは大きく異なるというのが実感です。

2019年に取材、撮影されたNHKの「世界ふれあい街歩き—キエフ—」を視聴したいと思います。実際の言語状況が反映されています。

(NHKの放送を視聴)

この番組では、街頭でインタビューを受ける市民がことごとくロシア語を使用しています。ウクライナ語を話しているのは、ウクライナ正教の聖職者だけです。2019年時点(「ウクライナ語の国家語としての機能保障法」が発行される前後)でのウクライナの言語状況を証言していると思います。

講演4 「ウクライナ語正書法史について」

寺田吉孝

○寺田氏

1798年に発行されたコトリャレフスキイ(ウクライナ語でコトリャレウシクィイ)の『エネイダ』は、ウクライナ語のポルタヴァ方言で書かれています。これはウクライナ文学の始まりであると同時に、ウクライナ語を文字化する契機となりました。しかし、ロシア帝国とソ連邦の下で、ポルタヴァではロシア語化が進み、ウクライナ語を耳にすることが少なくなっていました。

ウクライナ語正書法史では、ウクライナ語正書法をロシア語正書法に近づけるか否かが常に問題となっていました。1991年以降は、ウクライナ独自の正書法が確立されつつあります。また、ディアスポラが使うウクライナ語も正書法に反映させようという動きもあります。

このディアスポラは、主に19世紀後半以降、ポーランド(当時はオーストリアに併合されていた)が支配する西ウクライナ(特に、ハリチナー)から、アメリカやカナダ等へ移住した人たちです。

ハリチナー地域は、13世紀のルーシ分裂以降、20世紀中頃まで、ポーランドの影響をずっと受けているので、そのウクライナ語自体もポーランド語の影響が大きくなっています。

ウクライナ語のモノリンガルはハリチナー居住者が主です。また、正書法改革においても影響力を持っています。ディアスポラのウクライナ語にも配慮するということがよく理解できます。

また、ハリチナー地域では、ラテン文字化の試みも行われたことがあります。キリル文字をやめて、ラテン文字を使おうという動きですね。ウクライナ語のラテン文字化に関しては、現在も、政権の有力者から時折話題に出されています。

私の報告はこれで終わりにさせていただきます。

○**司会** すみません。進行が悪くて時間が随分逼迫しておりますが、幾つか御質問ありましたらお聞きいたしますが、いかがでしょうか。

よろしいですか。

○**寺田氏** ハターエヴァ先生の質問に関しては、また、後ほど聞いて、お伝えいたします。すみません。申し訳ないです。

○**司会** すみません、重ね重ねおわびいたします。

それでは、定刻になりましたので終了いたしますが、最後、もう一度、何か寺田先生に御質問あれば、一つ、二つ。

いかがでしょうか。よろしいですか。

はい。そうしましたら、定刻になりましたので、これで第10回の大会、終了いたします。

ありがとうございました。

(拍手)

北海学園大学人文学部 2022年度 優秀卒業研究賞

講 評

2023年3月10日

人文学部長 小 松 かおり

今年の優秀卒業研究賞は、力作揃いでした。4年間学んだ成果を存分に発揮しようという意欲に燃えた研究ばかりで、審査する側も力が入りました。

最優秀賞を受賞した武田佑希子さんの「現代における揖屋地区住民の『黄泉比良坂』観——黄泉比良坂伝承地と揖夜神社穂掛祭・一ツ石神幸祭——」は、審査委員全員一致で選出されました。『古事記』において、黄泉国と葦原中国を繋ぐ「黄泉比良坂」は、「出雲国之伊賦夜坂」、現在の島根県松江市にあるとされます。黄泉国と葦原中国の位置関係が『古事記』の世界観を表すと考えられたため、江戸時代の国学者から戦後の民俗学者に至るまで、「黄泉比良坂」が現実にとどのような場所であるかを論じる動きがありました。本研究は、彼の地であると言われる島根県松江市東出雲町の地域住民の解釈とその変遷を明らかにすることを目指した研究です。

この研究の魅力的な点は、江戸時代以降の主な議論を踏まえ、また、大正時代以降の文献研究を十分におこなった上で、GISを用いて調査地の景観の変化を確認し、さらには、実際に松江市にフィールドワークに赴き、伊耶那美命を祭神とする揖夜神社で行われる穂掛祭・一ツ石神幸祭を観察し、地元の人たちが祭りの中で語ることばを聞いて、祭祀と伝承がどのように関係しているのかを検証する、という複合的な方法を用いた点です。いわば、神話研究に、文献研究、地理学、人類学を採用したわけです。その結果、「現存する場所」にどのような意味が重ねられ、その意味が共有さ

れたり共有を拒否されるのか、ということがより住民の実感に近いと思われるレベルまで明らかになりました。

例年、優秀卒業研究賞は、最優秀賞と、言語・文学・思想・歴史・環境の各分野と英語で執筆した論文から選出された優秀賞が選ばれます。しかし、今回の審査では、最優秀賞は逃したものの、例年であれば最優秀賞を受賞した可能性があるとは評価された研究があったため、特別に、「特別優秀賞」を2本選出しました。

松久楓さんの「琉球列島における旧石器時代の人類活動——研究の動向と考古学的視点からみた今後の展望——」は、旧石器時代の琉球列島の考古学に関するレビュー論文です。琉球列島の考古学は、近年多くの成果を上げており、なかでも、2009年以降に沖縄本島南部で発掘が進むサキタリ遺跡からは、旧石器時代以降の道具類が多く出土しています。松久さんは、2000年代の新しい研究を中心に、120本もの先行研究から、旧石器時代の人類活動研究を整理しました。この論文は、資料の多さに加えて、考古・形質人類学・地理・地質・生物・気象・遺伝学など多くの関連分野を網羅しています。また、これまで琉球列島の環境利用が石器と骨角器を中心に語られてきたことに対して、貝の利用から検討し直すことの重要性を指摘し、サンゴ礁が発達する以前から世界最古の可能性もある釣り針を使用した漁撈が存在したことをはじめ、島嶼環境を生かす柔軟な技術が発達してきたことを論じたこと、また、それを、オセアニアから日本列島までの広大な地域の中において論じたことなど、論点の的確さと視野の広さも評価されました。小さな証拠の積み重ねからスケールの大きなテーマに挑む考古学の魅力を示した論文です。

中嶋奏子さんの「『ネイボップ』の実態と表象の比較研究」は、18世紀半ばのイギリスで「ネイボップ」と呼ばれ、特別な眼で見られた人びとについて、その実態と表象の差異を明らかにした論文です。「ネイボップ」は、若くしてインドに渡り、イギリス東インド会社の社員として働き、さまざまな方法で蓄財して帰国し、その財力でイギリス本国で「ジェントリ」の仲間入りをした一方で、蓄財方法について激しく非難された人びとです。

ネイボップは、イギリス本国では論じられてきたものの、先行研究が少ないだけでなく、一般の知名度も低く、わたし自身、この論文ではじめて「ネイボップ」の存在を知りました。本論文では、この魅力的な対象にいくつかの視点から取り組んでいます。ひとつは、先行研究を掘り下げて、下院議員となったネイボップについて、選挙区や当選回数などを分析して、議員としてのネイボップの実態を数量的かつ経時的に追う視点です。もうひとつは、ネイボップが活動していた時代に発表された戯曲と小説を分析し、当時のネイボップ像を明らかにする視点です。後者で分析された『人間というもの』という小説は、邦訳されておらず、中嶋さん自身が翻訳して分析しました。下院議員の属性という基礎的な資料分析と、文学作品における表象という2面からネイボップの実態と表象を追ったこの作品は、非常にユニークであり、読み応えがありました。また、邦訳されていない資料を探し出して分析した点も高く評価されました。

優秀賞には、言語分野から木村実結さんの「日韓母語話者の友人同士における不同意の言語行動の対照研究——ポライトネスに注目して——」と、英語論文として、鷺見知也さんの「An Analysis of Overlap in the TV Comedy “Sam & Cat”」が選ばれました。

木村さんの論文は、日本語と韓国語それぞれの母語話者の友人どうしの不同意表現について、先行研究の方法論を借用して比較したものです。8ヶ月の韓国・大田大学校における交換留学で培った語学力と人間関係を生かして、韓国4組を含む計9組の会話を分析しており、韓国語の生の会話データから分析するという語学力を生かした方法で丁寧な分析をしたことが評価されました。

英語で論文を執筆した鷺見さんは、カナダ・レスブリッジ大学への8ヶ月の留学中に論文を執筆しました。鷺見さんは、会話のターンテキングをテーマとして選び、会話の中のオーバーラップがどのように関係を構築するのに役に立つのか、という問いを立てました。もともとは生の会話を分析しようと計画していましたが、セッティングの難しさから、ドラマの分析に変更しました。ダウンロードしたドラマの SCRIPT を元に、実際



の会話のオーバーラップを確定していくという細かい作業を経て分析し、先行研究の整理と自分の研究の位置づけの正確さ、分析の丁寧さが評価されました。

今回の優秀研究には、「表現したいこと」、言い換えれば、自分のテーマがはっきりしている論文が多いと感じました。自分が学んだスキルを生かし、ことばを練って、自分の考えたことを表現したこれらの論文は、「考える力」と「表現することば」を身につけてほしいと考えている人文学部の教員として、とても嬉しい成果です。

また、いくつかの視点や方法論を組み合わせた独創的な研究が複数見られました。北海学園大学の人文学部では、特定の狭い専門分野に特化した学びというよりは、言語・文学・思想・歴史・環境という5つの分野にまたがる幅広い学びを提供しており、学生ひとりひとりが「自分」を中心として、学びを組み立ててほしいと考えています。そのカリキュラムを存分に生かした卒業研究が複数あったことは、日々迷いながら教育に取り組む教員の励みになりました。また、道外に資料収集にでかけたり、フィールドワークしたり、留学で学んだことを生かした研究も見られました。在学

中に、座学だけでなく、多様な体験をして、そこで身につけた学びを生かしてくれたことが非常にうれしいです。

今年度の卒業生は、大学時代のうち3年間で、新型コロナウイルスの流行の中で過ごしました。また、最後の1年は、ロシアのウクライナ侵攻によって、世界はどうあるべきか、これからどうなるのか、ということに否応なく考えさせられたことと思います。

人文学部では、「ことば」を武器として、答えのない、しかし重要な問いを見つけ、自分の頭で考え、考えていることを正確に表現し、人のことばをしっかりと受けとめ、対話できる人を育てたいと考えています。こんな時代だからこそ、卒業するみなさんには、これからも、人文学部で身につけた生きるために考える力を生かして、答えのない問いに向き合いながら生きていくことを願っています。

最優秀賞 (要旨)

思想文化群



現代における揖屋地区住民の「黄泉比良坂」観 ——黄泉比良坂伝承地と揖夜神社穂掛祭・一ツ石神幸祭——

武田佑希子 (2部日本文化学科 指導教員：鈴木英之)

黄泉比良坂は、『古事記』の世界観やその境界性について、また古代の死生観を決定づける重要な要素として、長きにわたり多くの研究者が注目してきた。しかし、黄泉比良坂にまつわる先行研究では、そのほとんどが黄泉比良坂を黄泉国と葦原中国との位置関係を判断する基準のひとつとみなし、黄泉比良坂を『古事記』の世界観を検証する上で議論の対象としている。

そこで本研究では、『古事記』の伊邪那岐命の黄泉国往還譚が、神話世界を現実世界の出雲国の伊賦夜坂に投影させる一文「今、謂出雲国之伊賦夜坂也。」で締めくくられていることに着目し、黄泉比良坂の現地比定をめぐる古今の議論、黄泉比良坂伝承地、コラムに登場する揖夜神社の穂掛祭・一ツ石神幸祭について、それぞれ資料研究とフィールドワークを行い、比較検討した。それらを踏まえた上で、揖屋地区住民の黄泉比良坂とのキョリ感を「黄泉比良坂」観として示し、先行研究では取り上げられてこなかった地域住民の視点を明らかにすることで、黄泉比良坂に対する解釈の多面性を明らかにできると考えた。

黄泉比良坂は、いわゆる黄泉国往還譚の中に見える地名で、一説に生と死の境界とされる。『古事記』上巻によれば、伊邪那美命は火の神を産んだ際の火傷がもとで死に、死者の国である黄泉国へと行ってしまう。悲しんだ伊邪那岐命は、伊邪那美命を葦原中国に連れ戻すため黄泉国に赴いたが、「見るな」の禁忌を犯し、伊邪那美命の変わり果てた姿を見たことでその怒りを買ひ、黄泉国から逃げ出すことになった。黄泉醜女に追われながら黄泉比良坂まで逃げ帰ったところで、伊邪那岐命は伊邪那美命がこれ以上

追ってこられないよう、黄泉比良坂に千人でやっと動かすことのできる大きな岩「千引の石」を置いて坂を塞ぎ、伊耶那岐命と伊耶那美命は訣別、これ以降、黄泉国と葦原中国は断絶された。そのとき、伊耶那美命は「葦原中国の人草（人間）を一日千人殺す」と言い、伊耶那岐命は「それならば一日千五百人生まれさせる」と答えることで、人間の生死が決まったという。

この黄泉比良坂を、『古事記』の「故、其所謂黄泉比良坂者、今、謂出雲国之伊賦夜坂也。」という記述にもとづき、現在の島根県松江市東出雲町揖屋に比定する説がある。また、2015年に発行された『松江市史』における「黄泉比良坂」の項では、「東出雲町には「黄泉ひら坂」と称する場所がある。どこがそこなのかということはあえて言及しない」と現地比定を避けながらも、同書収録のコラムによると、黄泉比良坂で訣別した伊耶那岐命と伊耶那美命には、地元住民によって語られるその後のストーリーが示される。それは揖夜神社の穂掛祭・一ツ石神幸祭にて、伊耶那美命が年に一度、一ツ石で待つ伊耶那岐命のもとに会いに行っている、というものだ。

神話の地名が、いかに現実の地に定められ、さらには『古事記』をこえる後日譚が創出されたのか。まず、黄泉比良坂を巡る学者の説や自治体の認識を考察するため、主に『島根縣史』、『東出雲町誌』、『松江市史』の3つの自治体史を文献資料として使用した。いずれも「黄泉比良坂」に関する項があり、特に自治体が黄泉比良坂をどのように解釈し、継承しようとしていたのかを考察することができる。1921年の『島根縣史』では、黄泉比良坂の伝承地の所在は古来より2か所とされ、1つは「揖夜神社御由緒書」を引用して八東郡揖屋村にあるとして、現在の比定地周辺の旧字である「平賀」の記載が確認できた。そして、もう1つは八東郡岩坂村大字日吉、劔神社のあたりとしている。1978年の『東出雲町誌』では現実の地に対する断定を避けているが、「平賀」の地名が確認でき、さらに建設当時の伝承碑の写真も掲載している。また、2015年の『松江市史』では『東出雲町誌』と同じく伝承地への直接的な言及を避け、「黄泉比良坂」は「四方つひら坂」であった可能性が高く、死者の国である黄泉へと通じているので

はなく、根の国や海原などにも通ずる文字通り「四方に開かれた坂」ではなかったか、という説を採用し、さらに別の項には江戸時代の国学者後藤夷臣が出雲国をフィールドワークした際の「海辺のなだらかな地である揖夜神社よりも劔大明神のある山のほうが“大石墨々”としていて「黄泉比良坂」にふさわしい」との一説を記載している。これらの文献資料から、1940年に当時の揖屋町長である佐藤忠次郎氏が「神蹟黄泉比良坂伊賦夜坂伝説地」と彫られた石碑を設置した現在の黄泉比良坂伝承地は、設置以前より比定地として語られていた場所であったということがわかった。

しかしながら、現在の伝承地以外にも「劔神社」など他の地名も見受けられたため、黄泉比良坂の現地比定をめぐる古今の議論を整理し、図表化することで、江戸時代の国学者をはじめとした研究者がどのような条件のもと黄泉比良坂の比定地を検討してきたのかを比較した。また、地理情報システム(GIS)を使用して、調査対象地のポイントデータを作成し、国土地理院発行の旧版地形図に位置情報を付与(ジオリファレンス)し、基盤地図情報とレイヤーで重ね合わせることによって、調査対象地の地形や過去と現在の景観変化を確認した。その結果、黄泉比良坂の比定条件には、地名や地形、千引の石の有無、黄泉比良坂が持つ役割の「境目」であるか等を挙げることができ、それらの組み合わせを複合的に見て「どこがより黄泉比良坂らしいか」によって現地比定を行っていることがわかった。

そして、現在の黄泉比良坂伝承地について、資料収集と現地調査を行った。当該の伝承地は、2010年公開の映画「瞬 またたき」(監督:磯村一路)の中で「あの世とこの世を繋ぐ坂」としてロケ地に使用されたり、また地元の保存会等によって亡き人への思いを記した「天国への手紙」を投函するためのポストが設置されたりと、『古事記』に見られる伊耶那岐命と伊耶那美命の決別の場所、また「黄泉国と葦原中国の境」としての場所の役割が「亡くなった人とのつながりを感じるこのできる場所」、「あの世(天国)とこの世の境目」として転化していることがわかった。周辺の整備も地域住民のボランティア等によって行われており、伝承地に訪れる人を大切に、観光地としてさらに盛り上げていきたいという認識が見受けられた。

さらに、揖夜神社の穂掛祭・一ツ石神幸祭の当日は祭祀の観察調査を行い、祭祀の前後には関係者や地域住民への聞き取り調査を行った。「一ツ石で伊耶那岐と伊耶那美が一年に一度会う」というストーリーを語る地域住民に出会うことはできなかったが、揖夜神社の祭祀を通して見えてきた氏子や関係者の「継承」への思いをうかがうことができた。

以上の黄泉比良坂にまつわる文献資料と現地調査の分析から、各々の立場による関心の違いや、スタンスの違いも明らかになった。「黄泉比良坂」の学術研究においては、本文で現実の場所と関連付けている事実と、現在の東出雲町にその場所である「といわれている」比定地があることをあまり重要視していない。その一方で自治体では、時代によって「黄泉比良坂」に対して異なる言説を採用したり、そもそも伝承地に対する見解を避けたりしながらも、地域住民によって語られるとされる伊耶那岐命と伊耶那美命にまつわるアフターストーリーを掲載するなど、観光資源であれば事実か伝承かは問わず積極的に採用するといったスタンスが垣間見られた。さらに、現地調査で出会った地域住民は、神話の「黄泉比良坂」を石碑が設置されている伝承地かつ地域の重要な観光資源として捉えており、また、揖夜神社は平安朝以前から広く知られた古社であり、その祭祀も田の神への感謝と豊作豊漁を祈念するもので、江戸時代後半以降に制作されたと考えられている本殿内の壁画にも描かれているような歴史ある神事として現在も執り行われている。地域住民は、神話と祭祀について、それぞれを異なる目的や意図を持って受け継ぎながら、地域住民の「黄泉比良坂」観を形成していた。

本研究の目的は、「黄泉比良坂がどこにあるのか」を明らかにするのではなく、「黄泉比良坂といわれている場所」について、現在の地域住民がどのような解釈のもと「といわれている」ことを認識しているのかについて明らかにすることである。今回の調査においては、『古事記』における黄泉国往還譚にまつわるストーリーや、地域住民によって語られるとされる伊耶那岐命と伊耶那美命のアフターストーリーと揖夜神社の祭祀との混淆は見られなかった。しかし、黄泉比良坂や揖夜神社祭祀にまつわる解釈や認識

が、今後も変わらぬまま受け継がれていくのか、もしくは時間の経過によって変化していくのかは、どちらの可能性も否定できない。「黄泉比良坂」に対する研究をさらに深化させるためには、対象地に対して今後も継続的な観察と調査を行いながら、『古事記』に描かれている「黄泉比良坂」という場所がこれまでどのように解釈されてきたのか文献学的研究によって時間を遡り、理解を深めていくことが必要であると考えられる。

特別優秀賞（要旨）

環境文化群



琉球列島における旧石器時代の人類活動 — 研究の動向と考古学的視点からみた今後の展望 —

松久楓（1部日本文化学科 指導教員：手塚薫）

本論文は、琉球列島旧石器時代における人類活動の様相について、先行研究を整理した上で、周辺地域という地理的な広がり（ヨコ軸）と貝塚時代という時間的な流れ（タテ軸）の2つの軸を用いた比較からその特徴を検討し、今後の課題を明らかにすることを試みたものである。

琉球列島は長らく、旧石器時代の人骨は見つかるものの、石器などの人工遺物の出土が乏しい地域であったことから、人類学的研究が中心となって展開されてきた。しかし、近年になってから「世界最古の釣針」など新たな発見が相次ぎ、人類学的視点からだけでなく、考古学的視点からも研究を進めることが可能になりつつあるというのが現状である。

人類が渡来した更新世末期から現在に至るまで、琉球列島は常に海によって大陸から隔てられた島嶼環境にあり、九州以北の日本列島とは異なる歴史を歩んできた。現在確認されている旧石器時代遺跡は15遺跡程度で、沖縄諸島以南の遺跡は全て人骨出土地であり石灰岩層中に形成された洞穴や裂罅（フィッシャー）である。人骨からは、形態学的分析やDNA分析、炭素・窒素同位体比分析など、琉球列島旧石器時代に生きた人々はどのようなルーツを持つ集団であったのか、どのような生活を営んでいたのかを明らかにするための研究が行われてきた。考古学的研究としては、かつて「叉状骨器」の存在が提唱されていたが、現在ではシカの異食行為による偽骨器であることが判明している。また、人類学的研究の流れを汲んだ「不定形剥片石器文化」の「北上仮説」も提唱されているが、仮説を裏付けるような物証に乏しく積極的な支持は得られていない。沖縄島南城市のサキタリ洞遺跡からは「世界最古の釣針」や赤色顔料が付着した貝製

ビーズ、大量のモクズガニ・カワニナが出土しており、シンプルな技術と身近な資源をきめ細かく利用する柔軟性で島嶼環境に適応した旧石器人のあり方が山崎真治氏により主張されている。

タテ・ヨコ軸を用いた比較からも、琉球列島における旧石器時代の人類活動の様相は、一般に資源が乏しいとされる島嶼環境で、身の回りの資源を効果的に利用したと考えられる柔軟性という特徴によって捉えることができるのではないかという結論に至った。この柔軟性はヒトの想像力から生まれるものであり、もので溢れた現代に生きる我々が学ぶ意義は大きいと考えられる。

今後の課題としては、さらなる資料の蓄積と分析方法の確立があげられる。今回の分析によって捉えられた特徴は限られた資料に基づくものであり、個別具体的な事柄に踏み込んで分析することもかなわなかった。そこで、大学院ではまず、琉球列島先史時代を通して確認されている貝殻利用について、旧石器時代と比較して資料が豊富に発見されている貝塚時代の様相を明らかにする研究に取り組んでいく必要がある。

歴史文化群



「ネイボップ」の実態と表象の比較研究

中嶋奏子（2部英米文化学科 指導教員：仲丸英起）

本論文では、18世紀中葉から末頃にかけて、インドで富を蓄え帰国した東インド会社員であるネイボップについて考察した。当時のイギリスではネイボップが激しく非難されたが、その評価は正当だったのか。正当でないとするとはそれはいかなる理由によるものなのか。ネイボップの実態と、イギリスの文学や戯曲で表象されるネイボップとを比較することで、イギリス人がネイボップに対して抱いていたイメージと実態の相違について明らかにした。

日本国内のネイボップ研究は等閑視され続けた期間が長く、先行研究が

比較的少ない。特に文学作品で描かれるネイボップとネイボップの実態とを比較した研究は、文学研究者の先行研究にいくつかみられるものの、歴史に軸足を置いたものは非常に少ない。史料と文学作品をもとにネイボップの実態と表象を比較研究することで、ネイボップに対する評価と当時のイギリス社会との関係性を明らかにしたことが、本論文の特徴である。また、ブリテン帝国がインド植民地支配を進める上で、人間に本能として備わる「性（セクシュアリティ）」をどのように政策として利用したのか考察した。ネイボップがどのようにインドの女性たちと関わりをもち、それがいかにインド植民地支配に影響を与えたのか分析した。彼女たちに焦点を当てた国内の先行研究も非常に少ないため、これまでの国内の先行研究とは別の角度から、ブリテン帝国のインド植民地支配について分析できたのではないかと考えられる。

構成は以下のとおりである。第一章では、ネイボップと呼ばれたのはどのような人々だったのか、彼らのインドでの生活について考察した。第二章では、ネイボップに対するイギリスでの評価、および下院議員になったネイボップについて、先行研究や史料をもとに分析した。ネイボップは出自の低い者が多かったが、インドで成した財産をもとに地方に所領を買い議席を求め、「ジェントルマン」としての生活を送った者が存在した。こうしたイギリス議会史の中でのネイボップの存在について考察した。第三章では、サミュエル・フット著の喜劇『ザ＝ネイボップ』(*The Nabob, a Comedy, in Three Acts*) (1772年初公開) およびロバート・ベイジ著『人間というもの』(*Man As He Is*) (1792年)をもとに、ネイボップの表象について考察した。『ザ＝ネイボップ』は、「ネイボップ」という社会層の存在を、あるいは少なくとも「ネイボップ」という言葉そのものを、広く世間に知らしめたという点で、きわめて貴重な歴史的資料であると思われる。そのため多くの先行研究で論じられているが、本論文でも改めて本作品の分析を行った。『人間というもの』は、英語およびドイツ語で刊行されているが、日本語は未刊行である。そのため和文の先行研究はなく、欧文の先行研究はいくつかあるものの、ネイボップに焦点を当てたものではない。

『ザ＝ネイボップ』がロンドン・ハイマーケットの劇場で上演されたのは1772年だったが、本作品はそれから20年後に刊行された。第三章の後半では20年の間にどのようにネイボップ像が変化したのか、「時間的経過」によるネイボップの表象の変化に焦点を当てた。

以上のように、本論文では政治、文化、文学という多角的な視点をもとに、独自の分析を加えネイボップについて考察した。

優秀賞（要旨）

言語文化群（言語）



日韓母語話者の友人同士における不同意の 言語行動の対照研究 —— ポライトネスに注目して ——

木村実結（2部英米文化学科 指導教員：田中洋也）

本研究は、大学生を調査対象者とし、日本語・韓国語における不同意表明の会話対照分析を通し、日韓両国のコミュニケーション方法の類似点・相違点を明らかにすることを目的として行った。研究の結果により、日本語を学ぶ韓国人、韓国語を学ぶ日本人の学習に貢献することも目的とした。研究課題は次の三点である。(1)日本語母語話者大学生、韓国語母語話者大学生は不同意の意思を表明する際に、どのような不同意緩和表現を用いるのか、(2)韓国語母語話者大学生は不同意マーカー、不同意発話行為などをどのような方略で用いるのか、(3)両言語の不同意意思表明は、いかなる点が共通しており、いかなる点が異なるのか。

本研究は、日韓母語話者における親密な間柄の会話におけるポライトネスのあり方を探る目的を持って行うものである。そのため、扱う会話データは、日韓母語話者の親しい間柄の課題解決型議論とした。調査は、日韓それぞれ10名、日本5組、韓国4組、計9組の会話を収集、分析対象とした。会話の収録は2022年に行われ、参加者には友人と2-3名ほどで議題に関して自由な20分程度の会話とその撮影を依頼した。

すべての会話データを文字に書き起こし、先行研究を参考に不同意マーカー、不同意緩和表現、不同意マーカー・不同意発話行為の方略について分析した。その結果は次の三点に集約された。

- (1) 日韓ともに、緩和表現の使用数は変わらなかった。韓国語の会話では否定形の使用割合が日本より多く、思想や推測の使用割合は53.8%と最も高い結果となった。一方、日本語の会話では疑問詞の使用割合

が最も高く、言い切らない文がほとんど出てこなかった韓国語の会話に対して、日本は多数使用される結果となった。韓国語の会話は「생각해(考える)」という思考の緩和表現を使うことで、自分の意見をしっかりと伝えながらも、あくまで自分の考えだということを強調する効果を持たせる特徴があることが明らかとなった。

- (2) 日韓ともに、不同意マーカ―は不同意本体の前に使用され、効果的に不同意意見を伝える役割を果たしていた。日本語の会話では、自身の不同意意思を緩和させ、相手との摩擦を和らげるために不同意マーカ―が使われていた。一方で、韓国語の会話では自身の不同意意思により注目してもらうために、不同意マーカ―が使われており、不同意マーカ―を一切使わず、不同意本体のみを表明する場合も多かった。
- (3) 不同意表明の本体のみを見ると、日本語の会話でもしっかりと自身の不同意を表明していた。より正確に自身の意見を伝えるために、不同意マーカ―や緩和表現を使用していると考えられる。一方、韓国語の会話ではあまり不同意マーカ―は使わず、直接的に不同意の意思表明を行われることが多いことが確認された。不同意マーカ―を使用する際も、自身の不同意意見を相手に聞いてもらおうとする積極的な働きかけとしての役割を果たしていると考えられる。

本研究では、日本語も韓国語も同様に緩和表現の使用回数は変わらない、不同意マーカ―は日本語と韓国語の会話において効果的に不同意を表明するために使用されている、両国における不同意マーカ―の役割が相違している、不同意表明の本体のみを見るとどちらの会話においてもしっかりと自身の不同意を表明しているという4つの傾向を明らかにした。しかし今回は大学生のみを研究対象としており、年齢層や地域によっても不同意表明の仕方が変わってくると考える。この点を今後の課題としたい。

英語論文



An analysis of overlap in the TV comedy “Sam & Cat”

鷺見知也（1 部英米文化学科 指導教員：米坂スザンヌ）

Each of us has encountered situations in daily life when we have been in conversations where we have interrupted or been interrupted by someone else, as well as situations where we have spoken at the same time. In conversation, there is often overlap, which is when participants talk at the same time. Overlaps are bad when those who disrupt the flow of the discourse pose a threat to the territory of the speaker who is currently speaking (Truong, 2013). However, overlaps can be supportive when they are clearly collaborative and do not imply any sense of rivalry or interruption of the speaker’s turn (Stubbe, 1998). This paper focuses on the impact of conversational overlap on the development of interpersonal relationships. The first few conversations in a new relationship are not likely to go entirely well. However, when the people get to know one another better, talking comes more naturally to them, and their conversations get smoother and smoother. My research question is: How is overlap used to establish the characters of Sam & Cat and to indicate their growing relationship?

The source material was the “Sam & Cat Season 1 Episode 1 #Pilot” Netflix video, a comedy on American television. To gather data, I watched the “Sam & Cat” Season 1 Episode 1 video on Netflix. From Readable (<https://www.allreadable.com/7382Hf3I>), I downloaded the script. To make it clear who was speaking, I included the line changes at the speakers. After that, I inputted every utterance into Excel. I continued to listen to the episode as I added speakers and finished the line adjustments. Finally, I gave the show three more listens to double-check the script’s accuracy. Data on overlap

was gathered in a number of steps. I first watched the episode in order to comprehend the scenario and locate the overlaps. Next, I read the English script after seeing the video. I then identified the sentences that overlap from the script.

This paper found three main points in Sam and Cat's conversation. The first was that throughout Episode 1, Sam had 110 utterances and Cat had 125, indicating that there is almost no difference in their turn-taking rates. Second, the number of overlaps was 10 for Sam and 11 for Cat. Although the number of overlaps varied from scene to scene, there is no significant difference in the overall number of overlaps between the two characters. On the other hand, Sam uses more positive overlap (7 times) than Cat (4 times), while Cat uses more negative overlap (7 times) than Sam (3 times). This shows about their personalities. Sam has a very friend-oriented personality; thus, it seems to reason that she cares for Cat even though they are not yet close. In contrast, Cat uses more negative overlap than Sam because of her anxious, emotional personality and intolerance of criticism.

I had anticipated that both characters would have more positive overlap in order to develop their relationship, but this was not so. The patterns remained consistent throughout, for both positive and negative overlap. Thus, it appears that the most crucial factor in conversations in a newly-developing relationship is that both sides have a good balance in terms of the number of utterances, the amount of turn-taking, and the number of overlaps. Sam and Cat just seem to fit together rather well overall, making it probably extremely easy for them to converse and establish a relationship. Thus, the positive and negative aspects of overlap may not be as significant as the balance between the two people's utterances.

How to Write Useful and Effective Reading Comprehension Tests for Intermediate Level Learners

Ian MUNBY

Abstract

If we teach reading comprehension skills to foreign language learners, we may need to test their reading ability. Although ELT publishers provide an abundance of reading comprehension tests, they may be unsuitable for our students due to issues with length, level of difficulty, or uninteresting and unfamiliar content. In addition, test items may not test the reading strategies that we wish to develop in our learners. Drawing from the research literature and personal experience, this paper describes an approach to writing a series of reading tests using needs-based specifications for text length, readability, and question type. The initial focus is on ways to modify texts from Wikipedia to suit lower intermediate to intermediate level students in an English major program in Japan. Next under the spotlight is topic selection for reading passages, especially in the light of what is known about how the level of reader interest and background knowledge may influence comprehension. With reference to a sample test in the Appendix, sometimes referred to as a practice test in this paper, the next objective is to explain methods for writing test items that foster reading strategy development. For example, to promote understanding of the rhetorical organization and main ideas of a text, advice is given on how to write paragraph headings to match with paragraphs. For testing

inferencing skills and comprehension of content and the author's purpose, some approaches to creating MC (multiple-choice) items and true or false statements are described. The paper concludes with guidelines for testing reading strategies such as understanding referents and signal words and guessing the meaning of unknown words.

Keywords: reading comprehension test, reading strategies

The teaching and learning situation

The series of reading comprehension tests referred to in this paper form part of an assessment package for required reading courses in an EFL program for English majors at a private university on the island of Hokkaido in northern Japan. Students enrolled in these courses take mid-term and end-of-term reading proficiency tests in each of the four semesters of their first two years of study. According to Bachman (1990) one of the two main purposes of language tests is to act "as sources of information for making decisions within the context of educational programs" (p. 54). In this context, the purpose of these tests is to make evaluative decisions about the students and their reading comprehension ability and changes in it over time. Each one-hour test consists of two reading passages with twenty questions each, and raw scores out of 40 are converted to percentage scores. However, Alderson (1996) cautions that reading tests such as the ones described in this paper should not be the only kind of assessment used in a reading course so each test is weighted to be worth 20% of the final grade for each of the four courses. The remainder is made up of 20% for homework reading tasks, 10% for two short story reviews, and 30% for two reading textbook chapter tests. A minimum final score of 60% is necessary to pass each course. The chapter tests are

essentially achievement tests since they are designed to test vocabulary and reading strategies that appear in the textbook and are taught in class. The mid-term and end-of-term tests are reading proficiency tests and they differ from the chapter tests because they have no separate vocabulary testing sections, and it is not possible for students to prepare for them by reviewing the textbook, for example.

Reading test length, level of difficulty and time allowed

Following the advice of Bachman & Palmer (1996), the writing of any test for learners of a second language should be underpinned by philosophical considerations. For example, they believe that test writers should design tests “so as to encourage and enable test takers to perform at their highest level of ability” (p. 13). It is, therefore, most important that reading comprehension tests be carefully tailored to suit the level of the test-takers and that ample time is allowed for them to read and answer the questions and demonstrate their ability. For this reason, although the specifications for this series of reading tests are inspired by and partly modelled on the academic module of IELTS reading tests, the latter tests were considered too difficult for most students in the program, and the time allowed was too short. For example, most students in this EFL program achieve scores of TOEIC 400–600 in annual in-house tests, corresponding to IELTS level 3 or 4, or lower intermediate to intermediate.

From an empathetic or learner-friendly point of view, Anderson (1999) reminds us “you want the learners to have a successful experience practicing new reading skills” (p. 117), and excessively challenging tests do not present optimal conditions for student success. Furthermore, from a practical point of view, in his discussion of factors affecting test reliability, Bachman (1990) points out that: “If the test is too easy or too difficult for a

particular group, this will generally result in a restricted range of scores or very little variance” (p. 220). Alternatively put, a restricted range of scores will defeat the evaluative purpose of the test.

However, with reference to Table 1, the length of the reading passages in this program is gradually extended in each semester of first and second year. In addition, the readability, or level of difficulty of the text passage, is

Table 1

Specifications for reading test passage length, time allowed, and level of difficulty for each course compared with a sample IELTS test.

	Number of words	Flesch-Kincaid grade level score	Time allowed per passage
1 st . year Spring Semester	600–650	9.0–9.9	30 minutes
1 st . year Fall Semester	650–700		
2 nd . year Spring Semester	700–750	10.0–11.0	
2 nd . year Fall Semester	750–800		
Sample IELTS test	760	12.5	20 minutes

also increased. Readability is measured according to the Flesch-Kincaid formula (Kincaid et al., 1975) which assesses text difficulty by considering the total number of words in a text, the average number of words per sentence and the average number of syllables per word in a text. For the purposes of this series of tests an online calculator (Good Calculators, 2022) was used to generate a Flesch-Kincaid grade level score corresponding to the US education grade level. For example, readability parameters for the reading passages for the first-year tests were set at 9.0–10.0, corresponding to ninth grade, and 10.0–11.0 for second year tests (see Table 1). The readability score for the sample test was 9.8 (789 words). Note that Section 1 of an online sample IELTS reading test (British Council, 2022, academic module) entitled “Electroreception” was assessed at grade level 12.5 by the calculator. The twenty minutes allowed for this test was also discovered to be too short not only for the IELTS test, but also for the reading tests

described here. It was determined by trial and error that thirty minutes was ample for each section of the test.

Wikipedia is recommended as an ideal source of texts for reading test passages. Nevertheless, with intermediate and lower intermediate level students, texts from this source may need to be extensively modified and simplified in order to match the specifications in Table 1. This process typically involves deleting large parts of the text, and the sample test was shortened to 789 words from an original Wikipedia entry of 2,840 words. It may also involve replacing many, but not all, of the lexical items likely to be unknown to students with known items, and shortening sentences by inserting periods, for example. Note that it is possible to reduce the Flesch-Kincaid readability grade level of a passage by dividing a small number of long sentences in half to increase the number of sentences. For instance, the readability grade level of “Electroreception” (2022), the sample IELTS reading passage referenced in Table 1, can be reduced from 12.5 to 10.9 by editing and increasing the number of sentences from 38 to 46.

The role of interest and prior knowledge in topic selection for reading test passages

The first step in designing a test is the selection of an appropriate reading passage upon which to base questions. Cohen (1994) recommends that we “choose a text with a familiar topic, that is interesting, has an unambiguous intent, and is of an appropriate length” (p. 250). Interestingness, or the degree to which a text is interesting to the reader, is hard to define, but in principle, most commentators agree that if L2 readers are engaged by the topic and the content of a reading passage, their text processing will be more successful. For example, Schmitt (2002), citing Carrell and Wise (1998), claims that “if either prior knowledge or topic interest is high,

students perform better than if both prior knowledge or topic interest are low” (p. 245). These findings were partly backed up by Eidswick (2010) who investigated reading topic interest and prior knowledge and its relationship to reading comprehension performance among Japanese college-level learners. Among the 11 topics he studied, he found that the three topics with the highest learner ratings for interest and prior knowledge were biographical texts. Perhaps unsurprisingly, he found that his subjects expressed more interest in reading about Michael Jackson than about concrete and viruses. His analysis of reading comprehension test results also revealed significantly higher scores with high interest and high prior knowledge topics. A second key finding was that there was no significant difference between reading test scores for texts on high interest-low prior knowledge topics and low interest-low prior knowledge texts. Finally, level of prior knowledge corresponded significantly with reading test scores. The suggestion is that prior, or background knowledge was a more important factor contributing to reading comprehension performance than topic interest.

Before addressing the issue of prior knowledge, it is worth noting some limitations concerning evaluation of topic interest in test passage selection. To begin with, famous people such as Michael Jackson often disappear from the limelight quite quickly, perhaps rapidly becoming uninteresting and unknown. Further, it may not be wise policy to select texts solely based on perceived high interest value among the target group of test-takers for two reasons. First, with students in this reading program, for example, high interest value topics may be too narrowly focused on pop music, movies, and smart phones. Second, since learners must learn to read and understand texts on an ever-broadening range of topics as they make gains in L2 vocabulary and overall second language proficiency, it is the duty of teachers to provide a variety of reading text types covering a variety of

topics in the language classroom.

As suggested earlier, prior knowledge of reading test topic is of paramount importance when designing effective and useful reading tests. Anderson (1999) defines background knowledge as knowledge which includes “all experience that a reader brings to a text: life experiences, educational experiences, and knowledge of how texts can be organized rhetorically” (p. 11). In the literature, this is also referred to as schema, or schemata. Absence of relevant schemata may lead to comprehension failure. As Anderson points out: “readers may not have any knowledge of playing certain sports. If you have no knowledge of how the sport is played, or the vocabulary involved in it, you have no knowledge to activate prior to reading about it” (p. 12). Weir et al (1999) observe: “The content of a text should be sufficiently familiar to candidates so that candidates of a requisite level of ability have sufficient existing schemata to enable them to deploy appropriate skills and strategies to understand the text” (p. 29).

On the other hand, care should be taken to ensure that the content is not so familiar that test-takers can answer comprehension questions without having to read the test passage. For example, Saito (2023) used ChatGPT to create a reading passage with comprehension and discussion questions on the topic of Shohei Ohtani, the Japanese star baseball player. The topic is likely to be of high interest among many young adult Japanese learners compared with other reading topics to be found in ELT reading textbooks. However, although it must be stressed that the materials were designed for teaching rather than testing, many learners would probably be able to select correct MC answers by using their knowledge of the player and his abilities and achievements without having to search for them in the reading passage. With these parameters in mind, test writers need to strike a careful balance between familiar and unfamiliar content.

The text passage in the sample test describes a brown bear attack in

Hokkaido. It was chosen not only because of recent heightened interest in wild bear encounters in the local news media, but also because the test-takers in this program here would be able to draw on and deploy local knowledge to support their text comprehension. In this case, topic familiarity and associated schemata are guaranteed since residents of Japan's northern island know that brown bears are large, dangerous, and hibernate in the winter. They also know that bears are sometimes encountered in residential areas, even entering people's houses in search of food. Furthermore, local place names and the Japanese names of characters that appear in the story would also be familiar. Although the story of the Sankebetsu bear attacks is famous, test takers would almost certainly not be able to answer the questions without reading the text.

However, before spending time preparing the test reading passage and questions, several suitability criteria must be satisfied. This involves previewing the candidate reading test passage for problems that may lie ahead in designing comprehension questions, specifications for which appear in Table 2.

Matching paragraph headings to paragraphs to test understanding of main ideas

Nuttall (1996) mentions three criteria for evaluating texts for reading development and these also apply to the development of effective reading tests. The first two - readability and suitability of context - have already been discussed but her third criterion of exploitability, or how easily a test writer can exploit a text, depends to a great extent on schemata, or, more specifically, the rhetorical organization of a text. To support reader comprehension, a reading passage needs to be organized or structured into paragraphs of roughly equal length, or in this series of tests, at least six

Table 2

Specifications for types of reading comprehension test questions.

Types of questions per passage	Number per passage
1. Matching paragraphs to main ideas	5
2. Multiple choice comprehension questions	
a) Guessing meaning of unknown words, or words with multiple meanings based on contextual clues in passage	2
b) Pronouns and referent words.	1
c) Signal words or expressions	2
d) Making inferences	1
e) Author's purpose	1
f) Other category comprehension questions	3
3. True or false statements	5
	20 (total)

Note: Comprehension questions should, where possible, be given in order of how information appears in passage.

Note: True-false questions should not be given in order of how information appears in passage. The goal is to force students to skim and scan the entire passage in order to locate the correct information with which to answer these questions.

paragraphs of between 100–150 words each. In addition, test writers need to ensure that they can write short headings for each paragraph if the headings in the original text are not available or suitable. Test-takers need to be able to match these headings to their paragraphs for Part 1 of the reading comprehension task, as specified in Table 2. This task involves identifying the main idea of each paragraph and is modeled on a testing format adopted in the IELTS reading tests. The matching activity is thought to promote effective reading strategies in the L2 reader. Wallace (1992), for example, makes the following claim: “Effective readers of all levels of ability will scan for specific information, skim to get an initial overview of a text, and be prepared to read and re-read with greater attention to those parts of the text that are of particular relevance to their

purpose” (p. 62). In the sample test, there are seven paragraph headings, one of which is used as an example, and one which is not used. This is to ensure that one incorrect matching does not automatically generate a second error. However, reading passages of seven or eight paragraphs can also be used with the task altered to exclude one or two initial or final paragraphs from the matching activity.

The following three points should be borne in mind to effectively exploit the paragraph matching activity and its key purpose of promoting the strategy of reading for main ideas. First, we should avoid vocabulary in the headings which is likely to be unknown to most test-takers. Second, we should try to avoid headings that are phrases that have been simply copied from the text, or headings which enable readers to perform matching without processing the text, or without activating schemata for identifying the main idea. As McNamara (2000) explains, test questions should be based on “rewordings of propositions in the text, not direct lifting of words or phrases from the text. Without paraphrase the task may require nothing more than a literal matching of similar words or phrases in the text and the question rather than an understanding of the meaning of the propositions involved” (p. 30). This may involve making alterations to some words in the text and headings to act as a disguise, by using synonyms for key words, for example. Finally, some texts have inherent, or in-built exploitability for the paragraph matching activity through their schemata. For example, biographies may exhibit readily exploitable rhetorical organization if they are structured chronologically with paragraphs focusing on, for example, early family life, education, rise to fame, height of fame, private life, and opinions of a famous person. Headings in Wikipedia entries can often be used directly or with simple modifications for the paragraph-matching activity.

Another schemata-based approach to the writing of passages for

reading tests involves structuring paragraphs on recurrent examples of themes or incidents. For instance, the sample test describes six encounters with the bear in six different paragraphs. This enables the reader to add information to existing schemata, or to adjust a recurring text pattern based on and reinforced by their predictions of text content. These predictions may include information a reader may expect to find including date, time, and place of the encounters, and details of who was involved and what happened to them and the bear, and how the encounter ended. The same strategy was used to write comprehension questions for a reading test in this series on the Loch Ness Monster, where paragraphs were organized into separate reported sightings of the monster. Similarly, this approach was used to structure paragraphs in a test describing UFO sightings in the USA. In the next section, we examine how recurrent theme-based paragraphs also add exploitability to enable the writing of comprehension questions.

Writing multiple choice questions and true or false statements for content comprehension

According to Brown & Hudson (2003) “reading . . . can be efficiently tested using the multiple-choice format” (p. 69), and there are ten multiple choice questions following the paragraph matching activity. This section focuses on the testing of understanding of inferences and the author’s purpose (one question each) and “other category comprehension questions” (three questions). The latter questions aim at more general content comprehension and test writers can also exploit schemata to simplify their writing, as in the following questions from the sample test:

6. How many times was the bear shot by hunters?

A. Two

B. Three

C. Four

D. Five

7. How many people died as a result of the bear attacks?
A. Five B. Six C. Seven D. Eight
8. How many people were injured by the bear?
A. Two B. Three C. Four D. Five

Scanning texts for information is a process normally associated with the initial stages of reading comprehension, and the search for main ideas. However, in order to answer these questions, the test-taker is required to re-read the relevant parts of each of the six paragraphs more carefully. Only by extracting information from the descriptions of each encounter is it possible to arrive at the correct number. In order to do this efficiently, the reader probably needs to have a good grasp of the rhetorical organization of the information in each paragraph to facilitate the search for the necessary information. This said, it is not necessary to create a reading passage which is structured around recurrent themes or incidents in order to develop a useful reading test. There are many other ways that a reading passage can be organized in order to allow a reader to utilize his or her experience and knowledge to support successful text processing. Smooth navigation through a six-paragraph text can also be fostered with texts describing stages of an interesting journey, a process, or the history of a person, a business, or a campaign to name a few examples.

However, before modifying a reading passage, it is essential to check for the availability of enough “hard facts” in the text upon which to base “other category comprehension questions”. Typically, these facts should take the form of potential answers to open questions including the *wh*-questions of *who*, *what*, *why*, *when*, and *who*, and *how* questions such as *how*, *how many*, *how long*, and *how often*). In other words, test-writers are advised to ensure that there are enough numbers, dates, times, and names of people and places, or even reasons for *why* questions, in order to enable the writing of comprehension questions including a correct answer with

three distractors (sometimes spelled “distracters”), or wrong answers. From personal experience, much time can be wasted by embarking on reading passage modification and on the writing of paragraph headings before noticing that there are not enough hard facts needed for question writing. For this reason, the comprehension questions are best written before beginning text modification to ensure problems do not arise later.

In addition, test writers need to be aware of several rules of thumb regarding multiple choice question writing. Brown (2005) offers the following advice. First, all unintentional clues to answering an item should be avoided. For example, one type of unintentional clue mentioned by Bailey (2018) is an option which is longer or shorter than the other three choices in the set. Therefore, all MC options should be of roughly equal length, and if that is not possible, two should be shorter and two should be longer. Question stems and options should also be as short as possible to avoid putting too much extra text processing burden on the test-taker. Second, all the distractors should be plausible, and certainly not what Cohen (1994) describes as “absurd” (p. 231). Third, needless redundancy, or word repetition, should be avoided in the options. As a personal preference, the only exception made to this rule concerns definite and indefinite articles (*a*, *an* or *the*). Fourth, the ordering of the options must be carefully considered. Note that the number of correct A, B, C or D answers should be as equally balanced as possible with no less than 2 and no more than 3 of each letter in a set of 10 test answers. Fifth, distractors such as “none of the above”, “all of the above”, or “both A and B” should be avoided.

Next, to satisfy the specifications, we need to include an inference question. According to Nuttall (1996): “These questions oblige the students to consider what is implied but not explicitly stated”. She adds: “they may require the reader to put together pieces of information that are scattered throughout the text” (p. 188). Alternatively put, they teach students to

examine the text in its entirety (Day & Park, 2005). For example, Question 13 in the sample test focuses on the ability to make inferences:

The bear was killed days after the attack on the Ota family home.

- A. two B. five C. nine D. fourteen

In order to infer that the correct answer is B, test-takers must notice in Paragraph One that the bear killed two people at the Ota family home on December 9. Although this date is not given in the text, we are told that it happened nine days after the bear returned to the Ikeda family home on November 30. Details of the bear's death on December 14 are given in Paragraph Six. Similarly, Day & Park (2005) suggest that questions requiring inferencing ability can be created from biographical information in a text where test-takers must infer and calculate a person's age at death by combining their date of birth, stated at the beginning of the text, and the date of death at the end. The date of death can be substituted for another important event in a person's life such as a marriage. While the inference questions described above are mathematical, there are other types which do not involve calculations and these will be subject of further discussion regarding both questions on the author's purpose or *true or false* items.

Alderson et al. (2015) claim that "interpreting an attitude or intention of a writer" is an important reading sub-skill (p.74), and the test specifications require that one item should test understanding of the author's purpose. It is customarily included as the final multiple-choice item since it may either require the reader to consider the text in its entirety or at least the concluding remarks in the final paragraph. Once again test-writers are warned against spending time transforming a Wikipedia entry into a suitable reading test passage before previewing the text for material upon which to base a question on the author's purpose. Although a writer's purpose is often categorized in simple terms as falling into one of three categories: to inform, entertain, or persuade (e.g. Wallace, 1992), they can

serve as a useful starting point. For example, with persuasive reading passages dealing with controversial issues related to social justice and movements for social change, questions can be centered around identifying the author's view from amongst four commonly held opinions. With informative reading passages about past events, the author's purpose question can be based on speculation surrounding the reasons behind an event. In the sample test, for example, Question 15 asks the reader to identify which of the four reasons suggested for the bear attacks is regarded as most likely by the author. Questions which ask the reader to consider the purpose of the whole text are more challenging to write, but one useful approach can be to base a question on the main idea of a passage. This could be whether the author's main purpose is to describe a person's life, a major event in the person's life, or to discuss that person's opinions, or a social theme related to these opinions.

The test specifications also call for the inclusion of five true or false items (as featured in the IELTS reading module), and these are useful when it is not possible to conceive enough distractors for a MC item. They also allow the test-writer further opportunities for testing inferencing skills and author purpose alongside regular content comprehension. As mentioned earlier, inferencing can be based on problems that a reader can solve by combining numerical information from two or more places in the text. However, an alternative approach to inferencing involves exploiting the subtext. For example, in the sample test passage, we can infer that the group of thirty armed guards made a serious mistake. In Paragraph 3 of the reading passage in the sample test we learn that they "headed down a river on what they thought was Kesagake's (the bear's) trail". The implication is not only that they were incompetent, but also that they could have prevented the attack on the Miyoke family home. Second, we can conclude from the information in the text that the bear Kesagake himself was quite

smart, especially in deciding not to enter a house where hunters lay in wait for him (Paragraph 5). During final editing of the test, true or false items based on these implications were removed.

We can also use true or false statements to exploit potential misunderstandings of the text that may arise from imprecise comprehension of a text. For example, Q20 in the sample test (The bear attacked a horse at the Ikeda family home) is designed to test degree of comprehension precision of the following lines from the reading passage: “the surprise encounter (with the bear) threw the family horse into a panic at the Ikeda family home (Paragraph One)”. The word “threw” is potentially suggestive of a physical attack on the horse when none took place. Finally, as a rule of thumb when writing true or false items, Cohen (1994) also warns that negatives and double-negatives should also be avoided because they can create ambiguity and confusion. Also, as mentioned earlier in notes related to Table 2, the true or false items do not appear in the order in which clues to answers are found in the text. The aim is to allow test-takers to activate scanning skills to locate the required information using his or her understanding of the structure of the text, especially the way it is organized into paragraphs.

Writing multiple choice questions for testing reading strategies: referent words, cohesive devices, and lexical inferencing

The remaining five items in the MC section of the test specifications (see Table 2) are reserved for questions focusing on the following three categories, or reading strategies: understanding referent words, cohesive devices, and lexical inferencing, with one or two of each category required for inclusion in the set of ten MC items. In the sample test, there is only one question on referent words, with two each for the other two categories. In

my experience, it is not necessary to preview a reading passage for the availability of these items in the way that is recommended for the other five MC items. This is because it should always be possible to design questions for these categories in any reading text that you select.

Although referent words are sometimes described as cohesive devices in the literature (e.g. Nuttall, 1996), for the sake of clarity, and to avoid ambiguity in this paper, I do not class them as such. Identifying and understanding referent words involves what Alderson et al. (2015) refer to as the reading subskill of “understanding grammatical relationships of words or phrases across text” (p.74). The referent words used most commonly in these tests are pronouns such as *it*, *he*, *she*, *they* or *them* or possessive pronouns such as *its*, *his*, *her*, or *their* which refer to nouns or noun phrases in the text. Understanding of reference can also be tested using demonstrative pronouns such as *this*, *that*, *these*, or *those*, which can also be exploited for probing reader understanding of both anaphoric and cataphoric reference. For example, *this* in a sentence, or part of a sentence, such as “this is what he did” can either refer to a verb phrase in a previous part of a text (anaphoric reference), or a part which follows (cataphoric reference). Referent words are underlined and numbered in subscript within the reading passage. For example, in the practice test, the item is presented as follows: “She heard a rumbling noise in the garden, but before she could determine what ₍₁₀₎ it was, the bear broke in through a window and entered the house”.

Q10. In Paragraph Four, it refers to ….

- A. the noise. B. the bear. C. the garden. D. the meal.

One design consideration to be borne in mind is that the referent word should not always be closest to the noun it refers to. However, the distractors should all be words or phrases that are present in the vicinity of the referent to be reasonable, or plausible options.

The second category tests the reader’s understanding of cohesive devices, also known as transition signals, or discourse markers. These are removed from the reading passage and replaced with a numbered space. For example, in the sample test, the item is presented as follows: “On December 13, a team of six hunters waited inside the house. [12] , the bear reappeared, but stopped and seemed to check the inside of the house by looking through the windows before returning to the forest”.

Q12. Complete Paragraph Five with the best word or phrase:

- A. Furthermore B. For example C. As expected
 D. In other words

Most of the cohesive devices used in this series of tests are taken from a list (see Table 3) adapted from Nordquist (2020). Some of the devices on

Table 3

List of cohesive devices from Nordquist (2020)

Type of transitions	Examples
Addition	also, furthermore, in addition, moreover, to begin with, next, finally, first, second, third, to make matters worse.
Cause-effect	as a result, for this reason, therefore, as expected
Comparison	in the same way, similarly
Contrast	but, fortunately, however, in contrast, nevertheless, on the other hand, unfortunately
Summary	at last, finally, in conclusion
Example	for example, for instance
Insistence	in fact, indeed
Place	above, beneath, behind, in front, on top of, under, to the left, to the right
Restatement	in other words, in short
Time	at the same time, currently, in the future, in the meantime, in the past, then, until now.

the original list, *notwithstanding*, for example, were removed because they were judged to be infrequent lexical items and likely to be unknown to intermediate or lower intermediate level learners. Even here, it is worth

teaching the phrases to test-takers before the test to limit the possibility that items designed to test learner understanding of text cohesion are simply testing vocabulary knowledge. One rule to follow in writing such items is to ensure that the correct answer and the three distractors each belong to a different type of transition. For example, in Question 12 above, the distractors and correct item represent the following four transition types: addition, example, cause-effect, and restatement. Typically, learners find MC questions in the cohesive device category more challenging than items testing referents. This is probably because they must process a larger quantity of text, or a larger proportion of the reading passage to answer the question. Alternatively put, these items may wield greater discriminatory power than questions on referents that require the reader to process more localized information.

The third and final category aims to test the reader's ability to guess the meaning of unknown words from context in a process also known as lexical inferencing or lexical guessing. Anderson (1999) claims: "L2 readers should be taught to use context to effectively guess the meanings of less frequent vocabulary" (p. 25). The process he recommends for doing this is based on a 5-step process described by Nation (2008) and begins with deciding its part of speech (p. 75–76) and following this with close examination of the context in the search for useful clues to meaning. These clues can exist in the same sentence as the unknown word, or further afield. As with the referents, the vocabulary guessing items are underlined and numbered in the reading passage as in the following example from the sample test. "In the panic that followed the cooking pot next to the ⁽¹¹⁾ hearth was overturned, extinguishing the flames, and the oil lamp was put out as well, plunging the house into darkness".

Q11. In Paragraph Four, the word hearth probably means . . .

- A. a fireplace. B. a table. C. a shelf. D. a window.

Needless to say the three distractors and the correct answer should all be in the same part of speech as the underlined word, which should also be highly unlikely to be known to the test-takers. In evaluating candidate vocabulary items for test-takers in Japan, it is important to ensure that the selected items do not exist as loan words in Japanese. Indeed, the author had selected the word “aggressive” for Question 14 of the sample test before noticing that the word had recently come to be used in soccer commentary. It was therefore replaced with the word “hostile”.

Conclusion

A final step in the creation of a reading test would normally involve trialing the test with a group of learners who are similar in level to the target test-takers. Following trialing, test answers should be inputted into a spreadsheet and submitted for item analysis using tools available on SPSS, for example. The main aim of the analysis is to determine the degree of item effectiveness, and test validity and reliability, but this was considered beyond the scope of this paper at the time of writing. With the practice test in the Appendix, two trials were conducted and one item (identifying referents) was replaced after the first trial because it was answered successfully by all the learners in the group taking the test. In this case, it was therefore possible to identify a failed item without the use of software. Further trials are required to confirm validity because a problem with one item mentioned earlier (guessing the meaning of unknown words), causing it to be replaced, was not discovered until after the second trial. Although the second trial produced a promising and satisfactory range of scores, it needs to be said that the validation process of the sample test has barely begun. Nevertheless, the test serves its intended purpose of illustrating the test writing process described in this paper, and should also be useful for

teaching students about the format of the test.

In overview of the pursuit of effective test-writing Cohen (1994) concludes: “It is very difficult to write successful items” (p. 231). This is especially true if, as pointed out on more than one occasion in previous sections, the test writer does not preview the reading passage for availability of suitable information with which to craft questions, particularly MC items. The key question is whether it is possible to simplify the process of writing useful reading tests through AI. In a previous section, it was reported that Saito (2023) had used ChatGPT to create a reading passage, reading comprehension and discussion questions (see Figure 1 for the specifications used).

Figure 1

Specifications for ChatGPT creation of a reading passage, reading comprehension and discussion questions for lower intermediate level learners of English

<p>Step 1: Write a 300-word article about Shohei Ohtani and set the level to be for A2 English learners.</p> <p>Step 2: Make a vocabulary list of ten words from the article that A2 English students should learn with a format of a table including English, Japanese, and other example sentences., Write the first letter of English words as a capital letter. Write examples which are not related to the article. Make “fill in” questions about the vocabulary.</p> <p>Step 3: Provide 5 comprehension questions with four answer choices each about the article.</p> <p>Step 4: Provide correct answers for each question and reasons for the answers.</p> <p>Step 5: Please explain the correct answers and the reasons in Japanese.</p> <p>Step 6: Provide 5 discussion questions about the article.</p>

Creating a useful reading test like the one included in the Appendix, and with the same specifications, would almost certainly require a much longer list of steps than in Figure 1. However, the possibility that effective tests can be created with AI is one that needs to be explored in further research.

References

Alderson, J. C. (1996). The testing of reading. In C. Nuttall (Ed.), *Teaching*

- Reading Skills in a foreign language* (pp. 212–228), Macmillan.
- Alderson, J. C., Haapakangas, E.-L., Huhtis, A., Nieminen, L., & Vllakonoja, R. (2015). *The diagnosis of reading in a second or foreign language*. Routledge, Taylor & Francis Group.
- Anderson, N. J. (1999). *Exploring second language reading. Issues and strategies*. New York: Newbury House Teacher Development. Heinle & Heinle. (International Thomson Publishing Company).
- Bachman, L. F. (1990). *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Bachman, L. F. & Palmer, A. S. (1996). *Language testing in practice*. Oxford: Oxford University Press.
- Bailey, K. M. (2018). Multiple-choice item format. *The TESOL Encyclopedia of English Language Teaching*, 1–8. <https://doi.org/10.1002/9781118784235.eelt0369>
- British Council. (2022, October 15). Electroception. Retrieved from: <https://takeielts.britishcouncil.org/take-ielts/prepare/free-ielts-practice-tests/reading-academic/section-1>
- Brown, J. D. (2005). *Testing in language programs*. New York: McGraw-Hill.
- Brown, J. D., & Hudson, T. (2003). *Criterion-referenced language testing*. Cambridge University Press.
- Carrell, P. L., Wise, T. E. (1998) The relationship between prior knowledge and topic interest in second language reading. *Studies in Second Language Acquisition* 20: 285–309
- Cohen, A. D. (1994). *Assessing language ability in the classroom*. Heinle & Heinle.
- Day, R., & Park, J. (2005). Developing reading comprehension questions. *Reading in a Foreign Language*, 17(1), 60–73.
- Eidswick, J. (2010). Interest and Prior Knowledge in Second Language Reading Comprehension. *JALT Journal*, 32(2), 149–168.
- Kincaid, J. P., Fishburne, J., Robert P., R., Richard L., C., & Brad S. (1975). Derivation of new readability formulas (automated readability index, fog count and Flesch reading ease formula) for Navy enlisted personnel. <https://doi.org/10.21236/ada006655>
- Good Calculator. (2022, October 14). Retrieved from <https://goodcalculators.com/flesch-kincaid-calculator/>

- McNamara, T. F. (2000). *Language testing*. Oxford University Press.
- Nation, I.S.P. (2008). *Teaching vocabulary: Strategies and techniques*. Heinle.
- Nordquist, R. (2020). *Cohesion strategies: A list of transitional words and phrases*. ThoughtCo. Retrieved November 17, 2022, from <https://www.thoughtco.com/transitional-words-and-phrases-1690557>
- Nuttall, C. (1996). *Teaching reading skills in a foreign language*. Macmillan Heineman.
- Saito, Y. (2023, May 14). *Exploring the Potential of Metaverse and ChatGPT in ELT* [Paper presentation] JALT PanSIG Conference 2023, Kyoto Sangyo University, Kyoto, Japan.
- Sankebetsu brown bear incident. (2022, October 6). In *Wikipedia*. https://en.wikipedia.org/wiki/Sankebetsu_brown_bear_incident
- Schmitt, N. (2002). *An introduction to applied linguistics*. Arnold.
- Wallace, C. (1992). *Reading*. Oxford University Press.
- Weir, C., Porter, D., & Green, R. (1999). *Language Testing: Materials*. Reading, UK: The University of Reading.

Appendix: Practice Reading Exam (Sample Test)

Instructions: The reading passage is followed by 20 questions. Read the passage and write your answers on the answer sheet. You have 30 minutes to complete the test.

① The Sankebetsu brown bear incident of December 1915 was the worst bear attack in Japanese history. Events began at dawn in mid-November 1915 when the bear first appeared at the home of the Ikeda family in Sankebetsu, near the west coast of Hokkaido. The surprise encounter threw the family horse into a panic, but the bear ran away after helping itself to harvested corn. When the bear reappeared on November 30, a local hunter shot and hit it, but failed to kill it. Nine days later, the giant brown bear turned up at the home of the Ota family attacking Abe Mayu and killing a baby she was taking care of. Mayu fought back, apparently by throwing firewood, but she was overtaken, knocked down, and dragged into the forest when she tried to escape.

② The next day a group of thirty men entered the forest and had advanced no more than 150 meters when they came across the bear, later named Kesagake. Five men shot at it, but only one managed to land a hit, whereupon the angry animal retreated, and the men escaped injury. Later, the hunters searched the area and discovered dried blood on the snow next to a tree. Beneath the snow were the half-eaten remains of Mayu. The bear had buried the corpse there to preserve it, as well as to keep it safe from other animals.

③ Believing the bear would come back, several villagers gathered at the Ota family's home with guns. Around eight o'clock on the night of

December 12, the bear reappeared and one man managed to shoot at it but missed his target. Hearing gunfire, a group of armed guards staying 300 meters away at the Miyoke house soon arrived, but the bear had vanished into the woods. The group decided to follow it and headed down a river on what they thought was Kesagake's trail. Meanwhile, when women and children from the neighborhood first received news of the attack at the Ota family home, they sought safety at the Miyoke family home. (9) , that was where the bear decided to head to next.

4 In the Miyoke family home, Yayo was preparing a late meal while carrying her youngest son, Umekichi, on her back. She heard a rumbling noise in the garden, but before she could determine what (10) it was, the bear broke in through a window and entered the house. In the panic that followed the cooking pot next to the (11) hearth was overturned, extinguishing the flames, and the oil lamp was put out as well, plunging the house into darkness. Yayo tried to escape, but Kesagake attacked her and bit Umekichi. Although Yayo survived, Umekichi died later from his wounds. Odo, the only guard who remained at the house, attempted to take cover behind furniture but was clawed in the back. The bear then attacked Kinzo, the third son of the Miyoke family, followed by his friend Haruyoshi, killing them both. It then bit Haruyoshi's brother Iwao, who survived with serious injuries. Next, Take, who was pregnant, was attacked and killed. Later her unborn child was retrieved alive from her body but died shortly after. When the group of guardsmen finally arrived back from the riverside, Kesagake escaped into the night.

5 It was decided that the bear would probably try to retrieve the bodies of those it had killed. A new approach was therefore proposed to lure the bear back to the Miyoke house using the body of a victim. At first,

the idea was widely condemned, especially by the families of the victims, but they finally agreed that for the future of the village it was the best course of action. On December 13, a team of six hunters waited inside the house. [12] , the bear reappeared, but stopped and seemed to check the inside of the house by looking through the windows before returning to the forest.

6 On the morning of December 14, a hunter named Yamamoto spotted the bear resting by a tree and approached within 20 meters. His first shot hit the bear's heart and the second shot hit his head, killing the animal which weighed 380 kilograms and was 2.7 meters tall. While many people believed that the attacks occurred due to the bear being woken by hunters during hibernation, others thought that it had woken too early in the winter because it was hungry. Another theory is that brown bears had to search for food close to humans after the land around Sankebetsu had been deforested. However, the bear did not attack anyone until it was shot. It therefore seems more likely that the bear had become ⁽¹⁴⁾ hostile due to its injuries.

Questions 1 – 5

[1 point each]

Paragraph Headings

Match each paragraph with a heading. Do not use answer G; it is used in the example. There is one other extra heading that you won't use. Write the answers on the answer sheet.

Example: Paragraph One Answer: G

List of headings

- A. Attack at dinnertime
- B. The death of Kesagake
- C. Return to the Ota farm
- D. A body is discovered in the woods
- E. The bear is seen by a river
- F. A new plan ends in failure
- G. The first attack (used in example)**

- 1. Paragraph Two
- 2. Paragraph Three
- 3. Paragraph Four
- 4. Paragraph Five
- 5. Paragraph Six

Questions 6 – 15

[1 point each]

Choose the correct answer, A, B, C, or D. Fill in the appropriate letter on the marksheet.

- 6. How many times was the bear shot by hunters?
A. Two B. Three C. Four D. Five

- 7. How many people died as a result of the bear attacks?
A. Five B. Six C. Seven D. Eight

- 8. How many people were injured by the bear?
A. Two B. Three C. Four D. Five

9. Complete Paragraph Three with the best word or phrase:
A. Similarly B. As a result C. In addition
D. Unfortunately
10. In Paragraph Four, it refers to . . .
A. the noise. B. the bear. C. the garden. D. the meal.
11. In Paragraph Four, the word hearth probably means . . .
A. a fireplace. B. a table. C. a shelf. D. a window.
12. Complete Paragraph Five with the best word or phrase:
A. Furthermore B. For example C. As expected
D. In other words
13. The bear was killed days after the attack on the Ota family home.
A. two B. five C. nine D. fourteen
14. In Paragraph Six, the word hostile probably means being . . .
A. weak and wanting to sleep.
B. angry and wanting to attack.
C. afraid and wanting to hide.
D. hungry and wanting to eat.
15. The author believes the bear attacked humans because . . .
A. it was woken by hunters. C. the area was deforested.
B. it was very hungry. D. it had been injured.

Questions 16 – 20

[1 point each]

Mark A for TRUE or B for FALSE.

16. The bear stole some food from the Ikeda family home.
17. When the bear attacked, Odo tried to escape from the Miyoke family home.
18. Mayu tried to defend herself from the bear.
19. After the bear left the Ota family home on December 12, it went down to a river.
20. The bear attacked a horse at the Ikeda family home.

Answer Guide.

1. D Paragraph 2
2. C Paragraph 3
3. A Paragraph 4
4. F Paragraph 5
5. B Paragraph 6
6. C Other category questions. The bear was shot once each in paras 1 & 2, and twice in para 6.
7. C Other category questions. Mayu & the baby (para 1), Umekichi, Kinzo, Haruyoshi, Take, & an unborn child (para 4).
8. B Other category questions. Yayo, Odo & Iwao (para 4)
9. D Signal words or expressions.
10. A Pronouns and referent words.
11. A Guessing the meaning of unknown words.
12. C Signal words or expressions.
13. B Inference. The attack on the Ota family home occurred on December 9 (nine days after it returned to the Ikeda family home on November 30). The bear was killed on December 14.
14. B Guessing the meaning of unknown words.
15. D Author's purpose.
16. A (True) Para 1. The bear stole some corn.
17. B (False) Para 4. Odo tried to hide behind furniture.
18. A (True) Para 1. Mayu fought back/she threw firewood at the bear
19. B (False) Para 3. The bear went to the Miyoke family home/The guardsmen headed down a river on what they thought was Kesagake's trail
20. B (False) Para 1. The bear only caused the horse to panic.

資料紹介 前川正の短歌

——『生命に刻まれし愛のかたみ』 未収録歌を中心に

田中 綾・一色 紗矢香・池 田 和 利

キーワード…三浦綾子、前川正、短歌、『道ありき』、『羊蹄』、『アララギ』、『旭川アララギ』、『土屋文明』、単行本未収録

前川正ただし（一九二〇～一九五四年）の名は、三浦綾子の自伝的小説『道ありき（青春編）』（主婦の友社、一九六九年）や、三浦（堀田）綾子との往復書簡を中心とした『生命いのちに刻まれし愛のかたみ』（講談社、一九七三年）で知られている。三浦綾子より二歳上の幼なじみであり、闘病中の綾子に短歌創作と聖書を読むことを教え、励まし続けた人物でもあった。北大医学部在学中から短歌を作りはじめ、全国的な歌誌「アララギ」を中心に発表し

ていたが、肺結核に罹り、一九五四年五月に死去。享年は三十三であった。

前川正の短歌は、『道ありき（青春編）』に十六首収録①されており、初出「アララギ」誌との異同については、田中綾「三浦綾子『道ありき（青春編）』の引用歌——小説フィクションにおける短歌引用という戦略ストラテジー」②で検証した。本稿では、そこで課題として挙げた「アララギ」以外の歌誌での初出を可能な限り調査した。その結果、『生命に刻まれし愛のかたみ』巻末にまとめられた「前川正歌集」（全一七三首）に未収録の短歌百十首を発見することができた。

まず、前川正が寄稿した「アララギ」以外の歌誌につ

いて短く述べておきたい。

「羊蹄」は、「アララギ」の北海道内会員の地方機関誌として、一九四六年九月から一九四九年十月号まで刊行された。樋口賢治⁽⁴⁾が中心となり、編集発行人は小森汎、発行所は、当初は「札幌市南十三条西十二丁目 樋口賢治方」であったが、三巻九・十月号(一九四八年十月)から「札幌市南一条西三丁目富貴堂内札幌講談社方」に移った。会員は道内外に約三百名いたが、樋口の東京転住を機に廃刊となった。のちの「北海道アララギ」刊行につながる歌誌の一つでもある。

「旭川アララギ会々報」(一、二号)、「旭川アララギ会報」(三〜十七号)、「旭川アララギ月報」(十八〜四十二号)は、前川正を編集者とする「アララギ」の地方誌であった。発行所や発行人の記載は号によって違いが見られたが、「旭川アララギ月報」の発行所は、「旭川市一区番外地 細谷弘治方」(第二十四号・一九五二年一月からは「旭川市春光町一区番外地」)であった。また、前川正が手術・入院後の第三十七号(一九五三年八月十六日)から、編集者は武田信義に変更になり、一九五四年二月

(二)

で終刊に至った。これらについては、上出恵子による綿密な調査「『旭川アララギ会々報』における三浦(堀田)綾子の短歌その他」に詳しい。⁽⁵⁾

以下、発表年順に短歌資料を紹介していくが、歌番号は便宜上のものである。☆★は同一歌と思われるため、⁽⁶⁾時期の早い「☆」にのみ歌番号を付した。また、歌番号の上の「*」は、『生命に刻まれし愛のかたみ』に収録されていない、単行本未収録歌百六首である。

なお、「羊蹄」「アララギ」誌における漢字の旧字体は、ワープロソフトで変換し得るもののみ反映させた。ゲラ刷りの「旭川アララギ会々報」「旭川アララギ会報」「旭川アララギ月報」は、ほぼ新字体であるため、特別に旧字体を使用したと認められたもののみ反映させた。

「アララギ」一九四六年七月号 七月集 其三

1・煤煙に黒ずむ春の雪の上投げ捨てられし蟹の甲赤し

「羊蹄」創刊号(一九四六年九月) 九月集 其一

2・濁流の引きしなだらの砂の跡川原に立ちて厭かず眺

めき

3・笹原の騒立ちみゆる春の風は廣き野面に渡り初めし
らし

4・黄昏れし廊下をゆけば生理學研究室の前に猫の鳴聲
きこゆ

「羊蹄」一巻十一号（一九四六年十一月）短歌作品 其二

5・白樺の葉がきらめきて搖るる時枝に吊るされたワイ
シャツひかる

6・講義室の窓明け放たれて若葉風すがしき中にノート
す吾は

7・薄緑にきらめく柔葉白樺の樹下に蒲公英の呆け飛び
立つ

「羊蹄」一巻十二号（一九四六年十二月）短歌作品 其二

8・局所をば放射狀に取巻いて止血鉗子の色の冷たし

9・腹膜を切れば薄黄の大腸のうねりゆくみゆオーメン
トム・マールユスも見ゆ

「羊蹄」一巻十二号（一九四六年十二月）歌會報 「羊蹄」

創刊記念歌會作品⁽⁷⁾

* 10・公孫樹葉の吹き溜りたる舗裝路に遅れし妻をG・I
は待ちゐる

「羊蹄」二巻二月特別号（一九四七年一月）短歌作品 其

二

11・二里あまり冷き水をのぼり來て日蔭の澤に吾山女魚
釣る

12・發電機の唸り轟く發電所の二階に友と酒を酌みてを
り

13・鐵骨と得子は朝の露に濡れ四基の大變厭器の低き唸
りは聞ゆ

「羊蹄」二巻三号（一九四七年三月）短歌作品 其二

14・雪の降る暗きまひるの街角に酸素熔接の青き閃き

15・鈴の音の靜かなる馬は氷柱の青く透きしを櫓に曳き
ゆく

16・病む床に一人仰向き爪切れば冴えたる音の響くこの

朝

- 「羊蹄」二卷六号（一九四七年六月）短歌作品 其二
17・夕されば熱のこもらふたゆき身を言ひつつアスピリ
ン錠劑を嚙む
- 18・羊蹄の誤植多きに省みれば校正手傳にゆかず久しき
- * 19・障子明るき部屋に静臥しつつ蠅一つゆるく飛ぶを眺
めをり
- 「羊蹄」二卷七・八号（一九四七年八月）短歌作品 其二
20・汗あえて登りて來れば水ありて水のほとりの木賊
瑞々し
- * 21・公孫樹葉の吹溜りたる舗装路を踏みしだきつつジ
プゆく朝
- 22・山羊に曳摺られ小走になりて少年は傾斜の下の草萌
に立つ
- 23・血沈値の大きかりしにこだはりて眩しき街を黙して
歸る
- 「羊蹄」二卷九・十号（一九四七年十月）短歌作品 其二
24・虫喰ひし蔭の廣葉の生ひ茂り日射豊けき山峽の道
- 25・クリスチヤン片山首相の事にもふれ基督教青年會の
相談終へぬ
- 26・ラヂオ・チャーチの時間となりて暫は静臥の儘に聖
書を開く
- 27・食慾もなく夕は疲れたり自ら腕にビタミンを打
つ
- 「羊蹄」二卷十一号（一九四七年十一月）短歌作品 其二
28・羊蹄とは植物にしてぎしぎしの異名なることを圖鑑
にて知りぬ
- 29・刺繡せる大きバツグを手を持ちて純白の靴の輕き足
どり
植村環女史
- 30・黒きローブに純白のネツク・レース飾りて一人講壇
に立つ見ゆ
- 31・はすにかぶりし帽子の下の瞳は澄み静なる聲で語り
出づるも

- 32・花甕にあやめの尖葉ゆらぎつつ祈らむとして眼つむ
る環先生たまき
- 33・會衆の彼方に豊かな頬は見え時々は澄める讚美歌の聞
こゆ
- 34・公園の木立の路を女學生輕々と自轉車を踏みて來り
ぬ
- 35・落葉の路歩み踏ためらふ少女あり白足袋の色の清しかる
かな
- 36・公園の木立の中を並びゆくに何か戀人の如き錯覺
- 37・このまま抱擁せば如何ならむなどと想ひつつ暗き道
を處女と並びゆく
- 38・酔ひて踊る人等と離れて若き少女ら圓く坐り聖書讀
二
- 「羊蹄」三卷一月特別号（一九四八年一月）短歌作品 其
二
- 39・柏葉一片ひら一片ひらと散る高臺に司會の處女の祈の聲は透
る
- 40・風通る二階の窓の凭り立ちてリルケの詩をば二三頁
讀む
- 41・脣の乾きにて醒めし眞夜にして試験電波の放送のこ
ゑ
- 42・轉々と職をかへゆく君は今宵小學校卒業の學歷をい
ふ
- 43・花甕の素枯れし菊の前にして牧師は吾等に箴言を説
く
- 44・マンホールの下流れゆく水の音霧深き朝を出でて來
れば
- 45・父に語る母の言葉の平凡なるに焦々として今宵早く
床に入る
- 「羊蹄」三卷二号（一九四八年三月）短歌作品 其二
- * 「羊蹄」三卷一月特別号（一九四八年一月）短歌作品 其
二

- 46・保存せし芳蘭支那料理菜單一部又しても談インフレ
に及ぶ
- 47・白々と構内照明塔に光あり引込線貨車群の屋根に積
む雪
- 「アララギ」一九四八年三月号 三月集 其二
- 48・意識的に一線を引きて處女に對するも永病む吾の小
さき倫理
- 「羊蹄」三卷四号（一九四八年四月）短歌作品 其二
- 49・ルーテルの宗教改革研究^{レフォルマチオン}を處女説く時に硬きドイツ
語の發音
- 50・ストーブの火勢衰へ來る頃漸く終へぬ圖書分類カー
ド二萬枚の整理
- 51・零下三十度の今日も單調に昏れゆけば六疊の間に淡
し蠟燭送電
- 52・師範生宗教への關心を嘲笑し虚無^{ニヒル}を言ひて煙草をふ
かす

- 「羊蹄」三卷五・六号（一九四八年六月）短歌作品 其二
- 53・未だ尙萌ゆるものなき枯野原舊練兵場に荒く吹く風
- 54・戀愛と結婚特輯號の雑誌をば眼鏡を取りて父讀み始
む
- 55・殺されしガンヂーにふれ不可能と思はれむ主義を貫
けといふ
- 「アララギ」一九四八年六月号 六月集 其三
- 56・さざめきて來る處女の一團此所にもまた亂れ來し日
本の語法
- 「アララギ」一九四八年七月号 七月集 其二
- 57・つづまりは主體性といふ語に逃避する君も僕も雑誌
よりの知識にて
- 「羊蹄」三卷七・八号（一九四八年八月）短歌作品 其二
- 58・雪解の水は音たて流れつつ裏街の家の軒に鳴く鳩
- 59・俄雨上がりし舗道輝きて金魚の鉢を並べ置く店
- 60・冷々とコンクリートに水を打ちし藥局に入り氷嚢を

購ふ

61・祈禱するひそけさにゐて頭上より梢隠れに鋭き鳥の
聲

「アララギ」一九四八年八月号 八月集 其二

62・性^{さが}明るき君が黙して従ふは吾が感情に氣づきし故か

「アララギ」一九四八年九月号 九月集 其二

63・粉炭の中にまじりし松の葉が靜臥始めし部屋にかを
りぬ

「羊蹄」三卷九・十号（一九四八年十月）短歌作品 其二

* 64・電壓の低くなりたるラヂオをば諦めつ今宵も早く寢

ねむよ

65・基督者^{クリスチャン}には戀愛は罪惡かとの反撥が牧師の説教より

萌し來りぬ

66・扁桃腺の熱に臥れる數日に葱の喰ひたき幾朝かあり

67・性慾の處理のことなど躊躇はず問ふ君に異なる世代
を感ず

「アララギ」一九四八年十月号 十月集 其二

68・英文タイプ修得が吾が望みにて月謝の工面が今月も
出來ぬ

「アララギ」一九四八年十一月号 其二 土屋文明選

* 69・肩抱き媚びるが如く私語^{ささや}くを傍らにして清し我等は

「羊蹄」三卷十二号（一九四八年十二月）短歌作品 其二

70・首突出し媚びる笑みにてマイクに向ふ女黨員は物慣
れし口調に

* 71・木洩陽も射さぬ樹蔭の芝草にひそひそとして語らふ
二人

72・鮮かに隈を取りたる唇は敬語などを言へば皮肉にゆ
がむ

73・水垢の浮きたる池の枯れ蓮秋の空氣の冷々として

74・雨にぬれ夜の鋪道は輝やきぬ林檎屋の店洋裁店

「アララギ」一九四八年十二月号 其二 土屋文明選

75・收獲の濟みし畑に残りたる紫蘇の實も今朝は土に散

りたり

「羊蹄」四卷一・二号(一九四九年二月) 短歌作品 其二

76・サンダルを素足に穿ける少女ゐて草生しづかに夕かげり来る

77・秋の陽の淡く照らせる切株田緬羊が二頭草喰みてゐる

78・鶏小屋に鶏交尾するさまを見て昂りもなく静臥にはいる

79・愛情の手紙も何かわづらはし蟋蟀の聲澄みて起りぬ
80・唇を得しと思ひしたまゆらに息荒々と眼覺めけるはや

81・緬羊が草喰む横を通り過ぎ尙奥深き林檎園をゆく

82・灌漑溝の澄みたる水につきのぼり林檎園への小道濕れるに入る

「アララギ」一九四九年二月号 其二 土屋文明選

83・踏みゆけば靴に抵抗感が柔やはらかしくローバーに霜結ぶ
凍土の道

84・意氣地なく距離を保ちて交はれば處女は次々と吾を

離れゆく

「アララギ」一九四九年四月号 其二 土屋文明選

85・若きらが萌す不安におびえつつ教授等の入黨を傳へ
來りぬ

「アララギ」一九四九年五月号 其二 土屋文明選

86・今度こそは迎合クリスチャンでゐたくなし外電は原
子戦争の悲惨を傳ふ

87・平和をば唯祈るより術なきか組織なく氣力なきクリ
スチャン我等

「羊蹄」四卷五・六号(一九四九年六月) 短歌作品 其二

88・打ちつくる如き言葉を交す聞く女を交へし學生の一
群

89・眞夜中を熱こもり來て眠れねば上の垂訓を吾は讀む
なり

90・明方に起りし咳に苦しみつ治まれば淡き淡きくれな

ゐの空

91・たはやすく君の肩に手を置く奴も居て思はず吾の昂りとなる

92・戦争を鼓吹せざりし消極を今となり孤高者と自誇するグループ

「アララギ」一九四九年六月号 其二 土屋文明選

93・平和とは永劫の希望かと思ふ時風見矢が方向を轉じたり

94・地下に潜る覺悟つかねば入黨をすすむる君に吾は無言なり

「アララギ」一九四九年八月号 其二 土屋文明選

95・サングラス掛けて晝間の街に出づ永病めばアカシアの芽吹きにも感傷しつつ

96・教會のプチブル性を肯へば或時は僕も思ふクリスチヤン・コミユニストの可能性を

「アララギ」一九四九年九月号 其二 土屋文明選

97・暴力を否定する我等クリスチヤン勞組で常に反動と呼ばれて

「羊蹄」四卷九・十号（一九四九年十月）短歌作品 其二

98・麥の秀に光集る岡の道永病むことを嘆きてくだる

99・唐黍の瘦せたるが立つ畑の道試歩する君に従ひてゆく

100・酔ひてゐる君を抱へて歸る時人氣なき鋪道を猫横切りゆく

101・黨に入り一つ理論を單純に信ずる君既に異なる世界

102・外電の短き記事に怖れつつ或る結論を抽き出さむとす

103・中國に擴りてゆく革命か心沁む大學生の加はることも

104・夕暮の堤に咳けば立留る川から靄は絶えず昇るかな

105・ゆるくゆるく風速計が廻りゐつ病める孤獨をば君嘆くとき

106・豚肉が煮立ち生姜が香に立つ夜この安らぎに頼らむとする

- 107・銀紙をむきてチーズを口に入れそのまま朝の静臥に入る
- 108・娶ることなくて病みつつ果つるべしまた雹の降る季節となりつ
- 「アララギ」一九四九年十月号 其二 土屋文明選
- 109・カーテンのなびかふ白く塗りし家永病む身をば嘆き來つれば
- 「旭川アララギ会々報」第一号(奥付なし、一九四九年十月か)
- 110・日本にレヂスタンスの無かりしを悔しと會へば今日も嘆かふ
- * 111・ガス管の埋設工事土を掘る裸身汗せるは鮮人ならず
- * 112・クリスチヤンの日和見主義を反動といふ五十嵐久弥の太き聲吾に向く
- * 113・トラツクがクラツチを切り替へて重々と眼下の坂昇りゆく
- 114・伸び枯れし蕨の立てる丘に居て或るかなしみに吾は
- 耐へをり
- * 115・墓石群曇の丘に鎮まれば吾がかなしみをさまる如し
- * 116・萩アザミの花も既に終りと嘆き言ひ春光台の丘のほりゆく
- * 117・赤土が蜒々とつづく丘の道轍のあとの水しろじろし
- * 118・蜻蛉が轍の跡の水の上群りとべり翅音ならしつ
- 119・この胸の空虚さは何の故ならむ枯枝が踏み折れて音立つるとき
- 「旭川アララギ会々報」(奥付では「旭川アララギ会誌」第二号(一九四九年十一月二十日))
- 120・夜更けて「きけわだつみのこえ」を読む母なりみれば泪ぐみあつ
- 121・枯草に雨が細く流れをり踏みなづむ君を伴ひ上る
- 122・細き雨降れる世界を外として廢墟の壁に身をば寄せ合ふ
- * 123・時雨ゆくひとときの間を廢墟にて枯葉集めて焚火する君
- * 124・白々と雨が外面そとを吹きてゆく窓に立ちいつか君泪ぐ

む

* 125・無影燈灯れる下の台上に胸廓整形手術始らむとす

126・止血鉗子みるみる数を増してゆき今メスは第四肋骨
をさぐる

127・鈍き音たてて截られし肋骨が透明な感じにて取出だ
されつ

「旭川アララギ会報」第三号（一九四九年十二月十八日）

* 128・君の声受話器に聴きて吾は去る別離の時と自ら決め
て

* 129・受話器より洩れ来し君の声想ひつつ雪ふきしきる街
歩みゆく

* 130・君に告げず去りゆくことをおのずから悲しむ如し雪
降る街に

* 131・雪の吹く街を面伏せ歩みゆく君との別離一人悲しみ
つつ

* 132・吹雪く街処女が面を伏せてゆく別離の電話掛けて出
でし時

133・トーストをココアにひたしたべてる君なりあはれ

病みつづけ居て

* 134・愛咬といふ文字に昂奮を覚えしはいつの年からかい
まだ吾は童貞にて

* 135・ヴァンデ・ヴェルデ讀みたることを君言ひきその君
が今初恋に失敗してゐる

* 136・キリストに君を連れむと伴へば既に噂姦ましきクリ
スチヤンの世界ぞ

* 137・なべては過ぎゆきとなりけり泪しつつ君日記を燃
やす

「アララギ」一九四九年十二月号 其二 土屋文明選

138・啄木きつぎ鳥が今しも音を立つる丘我がかたはらに汝はや
すらふ

139・この胸の空虚さは何の故ならむ枯枝が踏み折れて音
をたてつつ

「旭川アララギ会報」第四号（一九五〇年一月二十八日）

* 140・自らを道化どうけの如く虐げて振舞ふ君その寂びしさを今
宵は洩らす

- 141・Passive Resistance といふことを秘かな據点とし我等生くべし
- * 142・かたみに一つ言葉に傷きて別れたりき眼醒むれば今朝は霽降り居て
- 143・没り陽してみるみる昏くなれる丘啄木鳥が頭上の枝
移りゆく
- 144・安静の日々を守る君へ書きてやるポルトガルの尼僧の悲しき恋文のこと
- 145・電燈を消せば顕ちくる汝が言葉「あたしが死んだら解剖にしてほしい」
- 146・靄こめて星天頂に瞬けば友らのクリスマス・カロルの歌声が近づいてくる
- * 147・クリスマス・トリーに明く灯が入れば処女らは唱ひ出づ讚美歌一〇五番
- * 148・右の胸かすかに鳴りて醒めし夜半「主の祈り」をば称へてもみる
- * 149・夜半醒めて寝ねられぬまま口の中に「インマヌエル・アーメン」と繰返へしみつ
- 「アララギ」一九五〇年一月号 其二 土屋文明選
- 150・異性間の友情は信じないと母は言ふ夜遅く歸りし吾が錠おろす時
- 「旭川アララギ会報」第五号（一九五〇年三月二十日）
- * 151・君等との思想的断層を肯へど不安懷疑なき吾にもあらず
- * 152・君等には平穩に育ちし世代と見えるらし孤独なる実存なんて贅沢だ
- * 153・つきつめればそれも君等の自負にして一様に戦争の傷痕を言ふ
- ☆ 154・喘鳴の断えざる右胸を上にしていつしか吾は睡りゐしかな
- ☆ 155・窓硝子吹雪に鳴れる夜なりけり寂びしき今は汝に逢ひたし
- * 156・白き呼気吐きつつ夕べを歩みゆく汝が病むといふを聞くは悲しも
- * 157・ザラメ雪靴に重たき街の中疲れつつ寂びしきに尚歩みゆく

* 158 ・凍道いひみちに靴を滑らせ独り歩む今夜こよひは思切り疲れてみた

し

159 ・汝なをしたふ我が恋愛歌をば面白くなしと常に言ふ坂

本先生と金田君

* 160 ・吾わがが作る恋愛歌をば処女をとめ等読み揣摩臆測をなしをる

らしも

「アララギ」一九五〇年五月号 其二 土屋文明選

☆ 161 ・葡萄酒を一口飲みてまたいぬる午後の静臥は脚ちぢ

めつつ

「旭川アララギ会報」第六号（一九五〇年七月十日）

* 162 ・旅に出たき願ひを持つも儂なまきか注射器が煮え立つる

音ひそかなり

★ ・葡萄酒を一口呑みて又寝ぬる午后の静臥は足ちぢめ

つつ

* 163 ・寝返りて氷枕がまた鳴ればいつに癒えゆく吾かと思

ふ

「アララギ」一九五〇年七月号 其二 土屋文明選

164 ・平和をば希ふといふも虚しきか新聞社特報ビラに吾

も寄りゆく

「旭川アララギ会報」第七号（一九五〇年八月二十日）

* 165 ・愛するとは何のことならむ一人丘に来て問へば郭公

のこゑ

* 166 ・君を置きて来りしを悔ゆるにもあらず丘の上郭公の

声しきりなり

* 167 ・臨時ニュース終りしあとに君の云ふ「Freedom for
the thought that we hate is lost.」

168 ・自が意志なくて流されゆくさまも彼の日の如しさび

しけれども

「アララギ」一九五〇年八月号 其二 土屋文明選

169 ・レインコート這ひゐる蟻を拂ひ立つ丘降れば又忙し

き日常があり

「旭川アララギ会報」第八号（一九五〇年九月十日）

170・赫土に蛇がねむれる丘の上汗垂りて自転車をなほも

押しゆく

* 171・紫に葡萄の花の咲ける丘戦ひのなき平和なる世にあ
らねども

172・桜の芽の輝く丘を今は去る彼方に牛の群うつりつつ

* 173・医療国営の彼の国のこと想ひつつ控へ室の鏡に向き
てネクタイ結ぶ

「アララギ」一九五〇年九月号 其二 土屋文明選

174・郊外のリラ薫る道歩めれば「この儘で倅せなの」と
不意に汝言ふ

「旭川アララギ会報」第九号（一九五〇年十月八日）

175・吾が思惟を破るものなき丘の上時折に団栗が落つる
のみにて

☆ 176・菱の花咲きたる清き水あればペダルをゆるめ吾の寄
りゆく

177・白き鼻毛一本あるを苦心して切りたるあとはまた静
臥せむ

「アララギ」一九五〇年十月号 其二 土屋文明選

178・蚋の飛ぶ草に埋れし路のぼる淋しくなれば丘に来る
なり

「旭川アララギ会報」第十号（一九五〇年十一月十二日）

179・揚羽蝶汝の頭を去らず舞ふ草高く夕暮れて来し丘の
上

180・運ばれしラーメンを喰う汝なるが口すほめ幼き箸の
持ちやうなすよ

* 181・隣室に行きたる汝を気づかへばながくながく鼻汁^{はな}を
かむ音

* 182・渡りゆく歩道の鋏がきらめけり雑踏の中も寂びしき
ものか

* 183・肝臓を百匁買ひたる荷をさげて霜柱融くる街帰り行
く

「アララギ」一九五〇年十一月号 其二 土屋文明選

184・常よりは頬紅をつけて来しといふがポプラ青葉に映
えて弱々し

185・蝶多き草叢に伏してゐたりしが訴へ來たる汝が眼蒼し

「旭川アララギ会報」第十一号（一九五〇年十二月三日）

186・おもむろに世論作られてゆくさまを傍看し批判し爲すこともなし

* 187・排気管白く蒸気を噴ける角曲りて雪に眞向ひて行く

* 188・植字する君の机のかたはらに坐りしのみ吾はやすらぐ

189・「旭川アララギ会報」刷り上りインクのにほふ夜の吾が部屋

「アララギ」一九五〇年十二月号 其二 土屋文明選

★・菱の花咲きたる清き水あればペタルをゆるめ吾の寄りゆく

「旭川アララギ会報」第十二号（一九五一年一月三十一日）

☆190・マスクの紐ゆつくりかけて立上る出で行く今朝は零

下二十六度なり

191・干割れたる汝が唇を眼離さず見詰めてをりし脈計るとき

192・言論が抑圧されゆく過程さへなまなまとして彼の日の如し

193・黨員と見做さるることもおそろしく我等にタブーとなりし平和といふ語

* 194・大君をたたふる賀歌を作る茂吉先生これだけはどうしても好きになれぬ

「アララギ」一九五一年一月号 其二 土屋文明選

195・オーロラの如くに雲に色あれば没り陽の丘に來しを喜ぶ

「旭川アララギ会報」第十三号（一九五一年二月十一日）

196・凍らぬよう蜜柑をベッドにぬくめ置き夜半の渴ける時に喰ふなり

* 197・九度の熱降らず十日経にければ気弱くなりて醒むる夜半あり

「アララギ」一九五一年二月号 其二 土屋文明選

198・疲れしとふ汝を試歩路に抱へつつ停止せる風力計の輝きを見る

「旭川アララギ会報」第十四号(一九五一年三月十一日)

* 199・膳写インクに汚れし手をば洗はむと凍りたる洗面器に湯を注ぎをり

* 200・甘酒が沸きこぼれ急に匂ひ立つたゆけくも萌しくる熱に堪へてをりしに

* 201・氷枕のあたるあたりが痺るれどそのままの姿勢をつづく他人の如く

☆ 202・ネクタイを結びなほして呉る時近々と二重瞼が匂ふが如し

* 203・痣の如く腕に残りし傷の痕たはやすく冷凍植皮にたのみたりしが

204・単純に平和を希がふ吾等をば「ごまめの歯ざしりさ」と冷笑しをるとぞ

205・排気管豊かに蒸気噴ける角曲りて雪に眞向ひて行く

「アララギ」一九五一年四月号 其二 土屋文明選

★・窓硝子吹雪に鳴れる夜なりけり寂しき今は汝に逢ひたし

★・喘鳴の斷えざる右胸を上にしていつしか吾は睡りあしかな

「旭川アララギ会報」第十五号(一九五一年五月二十日)

206・共に病む吾らの試歩路ひつそりと測候所立つところを廻る

* 207・編輯の相談終へて帰りゆきし松枝君細谷君バーをあらいて愉快なりきと便り呉る

* 208・酒吞まねば君らより幾らかは煙たがられ早々として去る細谷君松枝君

* 209・湿布薬灰にほふ汝のベット言葉少なくて三十分を見守りて去る

* 210・歩行禁止を医師命ずれば彼の丘の草薺えむ今も行き見えれず

「アララギ」一九五一年三月号 其二 土屋文明選

※佐野先生送別歌会 一九五一・三・一一 高坂綾子宅

（十八頁に掲載）

* 211・寝切りの床なれば脚がだるしだるし折つてみたりあ
ぐらの姿勢をとつたりしても

* 212・バイを取り活字植多ゆき口重く答ふる君を見ればた
のしも

「旭川アララギ会報」第十六号（一九五一年五月二十七日）

* 213・原子砲既に実用の域に在りとラヂオ明るきことの如
く報じ終へぬ

214・ささやかな平和懇談会に繋がるを危険なことと牧師
さんは云ふ

215・再軍備反対を云ひて通じ合ふ二三の友の中に病み居
り

* 216・再軍備反対を云ふ吾に向かひ「病人の現実遊離さ
と去りゆく一人

217・サントニン黄視のままに臥て居れば熱萌す午后のは
かなし

「アララギ」一九五一年五月号 其二 土屋文明選

★・マスクの紐ゆつくりかけて立上る出で行く今朝は零
下二十六度なり

218・共に病む吾らの試歩路ひつそりと測候所立つところ
に終る

「旭川アララギ会報」第十七号（一九五一年六月十七日）

* 219・土屋先生秋には東京に転居さるるらしアララギの隅
に小さき報あり

220・昼の蚊が電球の囲りを飛ぶみつつ熱なき午后の安静
つづく

* 221・受話器より洩れくる細谷君の声輪転機唸れる中に途
切れて聞ゆ

* 222・「キリスト者平和の会」の会則に病人は半額月十円と
あるもあはれなること

* 223・組織なきクリスチャン我等と嘆きしは一昨年今は
「キリスト者平和会」に頼めり

「アララギ」一九五一年六月号 其二 土屋文明選

★・ネクタイを結び直して呉る時近々と二重瞼が匂ふ

が如し

の澄める音あり

* 230・部屋隅にかたまり蕎麥をすする細谷君とタイプピスト等部屋大方は消されて

「旭川アララギ月報」第十八号（一九五二年七月十五日）
224・新しく下げし網目カーテン揺れ居れば見慣れし空も

* 231・硝子扉の向ふは明るき印刷部なつぽ菜服の工員五六人動ける見えて

変化あり今朝は

* 232・ステロ鑄造機より次々と取出されし鉛板は白々として電灯の下

* 225・沃丁に爪を黄色く汚しし儘微熱ある汝は睡りて居たり

* 233・水噴ける冷却器に次々と鉛板は入れられてかすかに湯気を立つる愛しも

☆ 226・すかんぽにすがりつきぬし青ばったしづかに莖をのぼり始めぬ

* 234・輪転機始動十五分前しづかなる印刷室に空気流るる

「アララギ」一九五二年七月号 其二 土屋文明選

* 235・高速度輪転機黦々と立てるかげ油差し終へて工員去りぬ

227・エキホスが仄に匂ふ汝がベッド言葉なく三十分を見守りて去る

「アララギ」一九五二年八月号 其二 土屋文明選

「旭川アララギ月報」第十九号（一九五二年八月十九日）

236・我は羽を押へ弟は鶏の頸を切り父は窓から一部始終を見物し居る

228・義足鳴らしペタルマヤ踏みゆく一人あり易々と銀行の角を曲りてゆきぬ

「アララギ」一九五二年九月号 其二 土屋文明選

* 229・スタンドが青く灯れる業務局片隅に電話のダイヤル

237・沃丁のしみたる爪も目に立ちて微熱ある汝は睡り居

りたり

「旭川アララギ会報」第二十号 (一九五一年九月十六日)

* 238 ・ しめじ茸かほれる朝の味噌汁のこの平安やすらぎに頼れる我
か

239 ・ 永病みてかたみに愛す苦しさを蟋蟀の声の途絶えし
夜半にも思ふ

* 240 ・ 既に特審局あり治安省設置も確實といふ噂なべて彼
の頃と同じ経過にて

* 241 ・ 自転車に病みゐる汝を運びゆく交番が見えれば仲通
りに曲りなどして

* 242 ・ 水したたる砂碓押し上ぐる排土機が川原の中に■き
合はず

「旭川アララギ月報」第二十一号 (一九五一年十月二十一日)

☆ 243 ・ 乳鉢に葉磨りゐる澄める音静臥のままに聴きてをり
たり

244 ・ 下駄箱を改造し岩波文庫つめてある君の屋根裏部屋

に上り来りつ

* 245 ・ 黨員のT君I君ら逮捕されしといふ噂共に結核に苦
しみし頃の友にて

246 ・ 改築の成りたる我等の教会堂今宵は二階まで灯れる
が見ゆ

「アララギ」一九五一年十月号 其二 土屋文明選

247 ・ 赤クローバー揺れゐる丘に郭公かつこう鳴く此状を病みゐる
汝に如何にか告げむ

★ ・ すかんぽにすがりつきるし青ばつた静かに莖をのほ
り始めぬ

「旭川アララギ月報」第二十二号 (一九五一年十一月十八日)

248 ・ 灌溉溝乏しき水の光る側女ゐてひつそりと鉄屑拾ふ
249 ・ 丘に来て病みゐる汝を想ふ時何の樹か断間なく黄金こがね
に光る葉を降らせつつ

「アララギ」一九五一年十一月号 其二 土屋文明選

250・永病める汝との逢ひの歸る途緑の中に天文臺圓屋根ドーム輝く

251・笛の如く鳴り居る胸に汝を抱けば吾が淋しさの極まりにけり

「旭川アララギ月報」第二十三号(一九五一年十二月十六日)

252・されざれと煉瓦の堆を置ける原永病める汝をばおきて此所に来つれば

* 253・共産党或は岩波ファンと罵らる単純にクリスチャンとして平和願ふに

* 254・又してもどこからか看視されてゐる感じなり我等平和を説かなくなりぬ

* 255・キリストの時代にも言論抑圧の事実ありや「人黙さば石叫ぶべし」の聖句あり

「アララギ」一九五一年十二月号 其二 土屋文明選

★・乳鉢に薬磨りゐる澄める音静臥のままに聴きて居りたり

256・改築の成りたる我等の教會堂今宵は明々と二階まで灯る

「旭川アララギ月報」第二十四号(一九五二年一月二十日)

* 257・音もなく雪降る広場青色のすべり台も大方は埋れるつ

258・夜更けて病院より汝の電話あり雪降る夜は淋しとの声

259・暗々と雪降る街を来し少女素早くウインドウに髪直しゆく

「アララギ」一九五二年一月号 其二 土屋文明選

260・丘に来て病みゐる汝を想ふ時何の樹か斷え間なく黄金の葉を降らす

「旭川アララギ月報」第二十五号(一九五二年二月十七日)

* 261・白々と睫毛凍らせ行く朝あしたギヤラージの前ラヂエーターに湯を入れるたり

262・BCG接種反対者中に精神科教授内村祐之ゐつこれ

も医師界のボスの一人

263・「難民」と訳されしは displaced persons のこと「憩

ふ処なき民」と云へばあはれなるに

* 264・「対日講和條約は二年内に原子戦を誘発す」ベヴァンの言を記憶しをかむ

* 265・抑圧の政治あればテロ生ずるは必然その必然を我は怖るに

「アララギ」一九五二年二月号 其二 土屋文明選

266・手術後を安けく睡る汝の部屋水色に塗りたる教會堂を見下してゐる

「旭川アララギ月報」第二十六号（一九五二年三月十六日

または三〇日）

267・組織なければ虚無主義ニヒリズムに陥る日本青年層と分析されて一行の記事

268・悲しみを怒りに変へる術すべ知らず庶民などと甘やかされて今を迎へき

* 269・終バスを襟立てて待つ鎧扉どを降ろせしビルを吹く雪

の中

「アララギ」一九五二年三月号 其二 土屋文明選

270・截斷機に紙を仕掛ける秋雄君は中指のなき左手を器用に使ふ

「旭川アララギ月報」第二十七号（一九五二年四月二十日
または二十四日）

271・徴兵反対の掲示眺むる学生等サフランの鉢かばひ持つ一人あり

272・バーナーが青き焰を吹き置いてフラスコは細かき泡を立て始めきつ

* 273・フラスコが沸騰すれば白衣シユルツエのまま助教授君は茶を
入れくるる

274・音もなく雪屋根並を照らす火事夜の病室の窓に見て
あつ

* 275・小泉信三の「平和論」援用し再軍備説なる此奴案の
上会社重役なり

「旭川アララギ月報」第二十八号(一九五二年五月十八日)

* 276・中国の学生等今如何に学びをるらむか革命の口火切り成就なしたる今は

* 277・レミントン・タイプ打つ君のジヤケツ姿窓越して来る薄陽の中に

「アララギ」一九五二年五月号 其二 土屋文明選

278・BCG接種反對に専門外精神科教授内村祐之居つ此奴醫師界ボスの一人

279・悲しみを怒りに變へる術^{すべ}知らず庶民などと甘やかされて無爲の七年

「旭川アララギ月報」第二十九号(一九五二年六月十五日)

280・前脚を折りて食みゐる山羊の見ゆクローバー豊に揺るる堤防の上

* 281・部屋に君入り行きし気配しばししてタイプのキイを打ち出だす音

282・富と権力が再び結びゆく過程ちつぽけな日本なればパノラマの如し

「アララギ」一九五二年六月号 其二 土屋文明選

283・音もなく雪降る廣場青色に塗りたる滑り臺も大方は埋れつ

284・徴兵反對の掲示圍める學生等サフランの鉢をかばひ持つ一人あり

「旭川アララギ月報」第三〇号(一九五二年七月二十日)

285・ひつそりとせし二階には嬰兒^{あかご}るき眼覚めしままにかすかに笑ふ

* 286・札幌に汝を見舞ひし記念としインゼル版カロツサ詩集もとめ来たりつ

* 287・絶対安静ギプスに臥せる汝の溜息聞こゆれど睡りしさまを吾は続ける

「アララギ」一九五二年七月号 其二 土屋文明選

288・オーホツク^マの流水輝くを見て來しと云ふ病みて十二年吾は海を見ず

「旭川アララギ月報」第三十一号(一九五二年八月十七日)

289・夜を灯しビルの廊下に漆喰を塗りぬし二人吾を見詰
めぬ

* 296・跪く頭上に響く祈りああ西村先生が祈つて下さる

290・汗臭く我が腋にほふ午後にして果敢なく吾の何思ひ
ぬし

「アララギ」一九五二年九月号 其二 土屋文明選
297・追風にペダル踏み易く歸る道散るアカシアの數限り
なし

* 291・沈痛に卓をにぎりて語るさま既に聴衆の前に孤独な
りき

「アララギ」一九五二年八月号 其二 土屋文明選

「旭川アララギ月報」第三十三号（一九五二年十月十九日）
* 298・ペダル踏み柔らかき男声二重唱ポプラ並木路で吾を
抜きゆく

292・富と権力が再び結びゆく過程ちつぽけな日本なれば
ありありと見ゆ

* 299・糸垂らし煉瓦積みぬし職人が櫓より唾をおとしきた
りぬ

「旭川アララギ月報」第三十二号（一九五二年九月二十一日）
日）

* 300・狂人になりゆく前の手紙読むゴツホは弟にやさしか
りけり

* 293・夜を灯し漆喰を塗り急ぐ五六人影絵の如くロビーに
見ゆる

* 301・頑に頭はりゆきて反戦ビラ撒かむとしつつ死にしジ
ヤック・チボー

* 294・きしきしとサドルの弾機ばねのしなひつつ薄荷草匂ふ原
を分け行く

* 302・党員の君審かるる朝にして裁判所前二三度吾は行つ
てみる

* 295・灯を点し幻の如くに立てるビル流れる霧の白き視界
に

「アララギ」一九五二年十月号 其二 土屋文明選

303・ギプスベッドの凹みはありありと汝が裸身乾しある
見れば心ゆらぎぬ

304・これから二年入るべき棺状ギプス眼守る汝は今朝は
殊更に明るく話す

「旭川アララギ月報」第三十四号(一九五二年十一月十六日)

305・バイブルを読まざるを責めて来たるかな窓に音たて
て霰降る今朝

306・きしきしとサドルの軋り吾が自転車萩の紅葉づる丘
降りゆく

* 307・奴隸的植民地国家といふことをいまいましてけれど認
めるよ僕も

「アララギ」一九五二年十一月号 其二 土屋文明選

308・急速に警官の思想が固定しゆくさま那須三造の歌は
示せり

「アララギ」一九五二年十二月号 其二 土屋文明選

309・跪く頭上近々と響く聲ああ今西村先生が祈つて下さ
る

「アララギ」一九五三年一月号 其二 土屋文明選

310・雑草の中より薄荷草匂ふ丘の上自轉車を横たへし時

「アララギ」一九五三年二月号 其二 土屋文明選

311・聖書をば読み合ひて寝に就かむとす明日吾は汝をベ
ッドに置きて去る

「アララギ」一九五三年七月号 其二 土屋文明選

312・廣底瓶コルベンに酸素氣泡の清き音麻酔の醒めし耳に聞こゆ
る

313・麻酔醒むれば吾を見守れる母の顔左の腕さすを撫り呉れ
あつ

「旭川アララギ月報」第三十七号(一九五三年八月十六日)

小原 耀 君に

314・鋭く清き音色立つるかな常臥しの瘦せたる君が振る

鈴のおと

* 315・枕元の小鈴を取りて振る君に高き窓より射す光あり

* 316・業々明けてジャム罐を添へ呉れしパン六年振りの君の横に食ふ

317・寿命などと弱気の言葉使ふ止めて小原君きみも胸郭成形手術受け給へよ

「アララギ」一九五三年八月号 其二 土屋文明選

318・手術二日目酸素に唸^{あざと}呶ふ吾を見て牧師さん静かに祈り去る

「旭川アララギ月報」第三十八号（一九五三年九月二十日）

* 319・酸素をば喘ぎつつ吸ひ水を欲る吾が傍らに母と弟

320・剪除せし己^{おの}が肋骨を貫らひ来し透きとほるやうに見ゆるもあはれ

321・喘ぎつつ酸素吸ひしも過ぎ去りて今日は砂囊を一つ減らしぬ

「アララギ」一九五三年九月号 其二 土屋文明選

322・茫々天地間に漂ふ實存と己れを思ふ手術せし夜は

「旭川アララギ月報」第三十九号（一九五三年十月十八日）

☆ 323・二重窓の外はおだしき雪ひかり手術のあとの輸血終りぬ

「アララギ」一九五三年十一月号 其二 土屋文明選

324・肋断ちし胸の痺れて醒めしとき荒れたる庭の邯鄲のこゑ

「アララギ」一九五三年十二月号 其二 土屋文明選

★・二重窓の外はおだしき雪光り手術のあとの輸血終りぬ

「アララギ」一九五四年一月号 其二 土屋文明選

325・日あたりに家鴨泳げる池の邊に赤塗りの自轉車ゆるめ配達夫來る

326・ストリップ劇観る事もなく病めれどもいつよりかバタフライといふ語も知れり

「アララギ」一九五四年二月号 其二 土屋文明選

327・一夜かかり母の白髪を染めし父朝より高校野球に伴ひ行きぬ

「アララギ」一九五四年四月号 其二 土屋文明選

328・遺言の筆談終へて今は唯打ちたるモヒにしばし眠らむ

「アララギ」一九五四年五月号 其二 土屋文明選

329・部屋に置くクレゾール水の凍りゆく鋭き音を聞きゐたりけり

「アララギ」一九五四年六月号 其二 土屋文明選

330・脂あぶらして二時間かかり痰を出す吾よりも辛さうに母の見てゐつ

「アララギ」一九五四年七月号⁽⁸⁾ 其二 土屋文明選

331・汗の中に覺めたる吾に赤く染めし復活節の卵とどきぬ

332・焚くことも稀になりたるストーブの上に谷地落の緑を置きぬ

【単行本未収録歌の図版の一部】

①「旭川アララギ会報」第三号（一九四九年十二月十八日）表紙



② 「旭川アララギ会報」第三号（一九四九年十二月十八日）前川正の短歌の一部

前川 正
君の声 受話器に 聴きて 吾は 去る 別離の時
と自ら 決め 受話器より 洩れ 来し 君の 声 想ひ 一つ 雪ふ
き しさる 街歩み ゆく 君に 告げ ず 去り ゆく こと おの ず かなら 悲
しむ 如し 雪降る 街に 雪の 吹く 街を 面伏せ 歩み ゆく 君との 別離
一人 悲し み 吹雪く 街 処女が 面を 伏せて ゆく 別離の 電
話 掛けて 出でし 時 トースト を ココア に ひたし た べて おる 君
なり あは れ 病み つけ 居て (ク)

③ 「旭川アララギ月報」第三十二号（一九五二年九月二十一日）前川正の短歌

旭川 前川 正
夜を 灯し 深喉を 塗り 急ぐ 五六人 影絵の 如く ロビーに 見ゆる
西しきし と サドルの 弾丸の しなひ つつ 送荷車 ぬふ 聲を 分け 行く
灯を 熱し 紅の 加くに 立てる ビル 流れる 霧の 白き 煙草に
遠く 路上に 響く 祈り ああ 西村 先生が 祈つて 下さる

④ 「旭川アララギ月報」第三十二号（一九五二年九月二十一日）奥付

規程

旭川アララギ月報会員は毎月定額十圓（特別の場合には別段申しこみ）を投函出来る。文章等も自由。原稿の取扱は編集会議で決める。原稿は返戻せず。締切は、前月二十五日。編輯者発送所のこと。

一九五二・九・二一・発行 二五円
旭川市春光町一區番外苑 細谷弘治
其行所
発行所 旭川市春光町一區番外苑 細谷弘治
高橋君 旭川市九條通十七丁目石五 前川 正
半年一五〇円 一年三〇〇円
(取替 旭川四二八九番 前川友吉)

旭川アララギ短歌会

469792 46988
三浦綾子記念文字館

注

(1) 三浦綾子の『道ありき（青春編）』に収録された短歌は、三浦（旧姓堀田）綾子のもものがのべ四十四首（うち、二首が二回登場）。前川正の短歌が十六首。北海道学芸大学（現、

北海道教育大学) 旭川分校教授であり、「アララギ」会員でもあった坂本富貴雄(「アララギ」では「坂本路夫」の筆名)の短歌が一首。ほか、「アララギ」会員の坂本兎美の短歌が一首。最終章の「五八」章に、三浦光世の短歌が三首引用されていた。計、のべ六十五首であった。

- (2) 「アララギ」に関しては、田中綾「三浦(堀田)綾子の短歌——『アララギ』土屋文明選歌の考察」(公益財団法人北海道文学館編「資料情報と研究2013」(北海道立文学館、二〇一四年三月)所収。)や、池田和利と田中綾の共著「資料紹介 三浦(堀田)綾子の『アララギ』掲載歌」(北海道立文学館「北海学園大学人文論集」第五七号(二〇一四年八月)所収)に詳述している。

- (3) 公益財団法人北海道文学館編 図録・作品集「北方文芸 2017」(北海道立文学館、二〇一七年七月)所収。
 (4) 樋口賢治(一九〇八〜一九八三年)は、北海道滝川市生まれ。一九二八年に「アララギ」に入会し、土屋文明に師事。一九四五年から一九四八年まで日本出版協会札幌支部に勤務し、のち、光村教育図書常務となった。三宅奈緒子編『樋口賢治全歌集』(短歌新聞社、一九八九年)などがある。

- (5) 上出恵子『三浦綾子研究』(双文社出版、二〇〇一年)

所収。

- (6) 以下は、傍線部など一部明らかに表現が異なるため、同一歌とは見做さなかった。

「旭川アララギ会々報」第一号(奥付なし、一九四九年十月か)
 119・この胸の空虚さは何の故ならむ枯枝が踏み折れて音立つるとき

「アララギ」一九四九年十二月号 其二 土屋文明選
 139・この胸の空虚さは何の故ならむ枯枝が踏み折れて音をたてつつ

「旭川アララギ会報」第十一号(一九五〇年十二月三日)

* 187・排気管白く蒸気を噴ける角曲りて雪に眞向ひて行く

「アララギ」一九五一年三月号 其二 土屋文明選

205・排気管豊かに蒸気噴ける角曲りて雪に眞向ひて行く

「旭川アララギ会報」第十五号(一九五一年五月二十日)

206・共に病む吾らの試歩路ひつそりと測候所立つところを廻る

「アララギ」一九五一年五月号 其二 土屋文明選

218・共に病む吾らの試歩路ひつそりと測候所立つところに終る

「旭川アララギ月報」第二十一号(一九五一年十月二十一日)

246・改築の成りたる我等の教会堂今宵は二階まで灯れるが見

ゆ

- 「アララギ」一九五二年十二月号 其二 土屋文明選
- 256・改築の成りたる我等の教會堂今宵は明々と二階まで灯る
- 「旭川アララギ月報」第二十二号（一九五二年十一月二十八日）
- 249・丘に来て病みある汝を想ふ時何の樹か断間なく黄金こがねに光る葉を降らせつつ
- 「アララギ」一九五二年一月号 其二 土屋文明選
- 260・丘に来て病みある汝を想ふ時何の樹か断え間なく黄金の葉を降らす
- 「旭川アララギ月報」第二十五号（一九五二年二月十七日）
- 262・BCG接種反対者中に精神科教授内村祐之のつこれも医師界のボスの一人
- 「アララギ」一九五二年五月号 其二 土屋文明選
- 278・BCG接種反対に専門外精神科教授内村祐之居つ此奴醫師界ボスの一人
- 「旭川アララギ月報」第二十六号（一九五二年三月十六日）
- 268・悲しみを怒りに変へる術すべ知らず庶民などと甘やかされて今を迎へき
- 「アララギ」一九五二年五月号 其二 土屋文明選
- 279・悲しみを怒りに變へる術知らず庶民などと甘やかされて無爲の七年

「旭川アララギ月報」第二十七号（一九五二年四月二十日または二十四日）

271・徴兵反対の掲示眺むる学生等サフランの鉢かばひ持つ一人あり

「アララギ」一九五二年六月号 其二 土屋文明選

284・徴兵反対の掲示圍める學生等サフランの鉢をかばひ持つ一人あり

「旭川アララギ月報」第二十九号（一九五二年六月十五日）

282・富と権力が再び結びゆく過程ちつぽけな日本なればパノラマの如し

「アララギ」一九五二年八月号 其二 土屋文明選

292・富と権力が再び結びゆく過程ちつぽけな日本なればありと見ゆ

(7) この一首のみ「札幌 前川正」の名義であり、ほかは「旭川 前川正」であった。

(8) この二首は「旭川 故前川正」の名義で掲載された。

なお、調査にあたっては、北海道立図書館北方資料室、北海学園大学附属図書館、北海道大学附属図書館、三浦綾子記念文学館にお世話になった。あらためて感謝申し上げる。